

---

# バンキングパネル(Banking Panel)

## 第2回会合 資料

### 邦銀のアジア業務に関する「定点観測」



**2012年10月2日**

---

株式会社野村総合研究所

金融ITイノベーション研究部主任研究員

嶋村 武史

金融ITイノベーション研究部長

井上 哲也

〒100-0005

東京都千代田区丸の内1-6-5 丸の内北口ビル

---

## 1. 地理的な特徴とその背景

# 1. 地理的な特徴とその背景

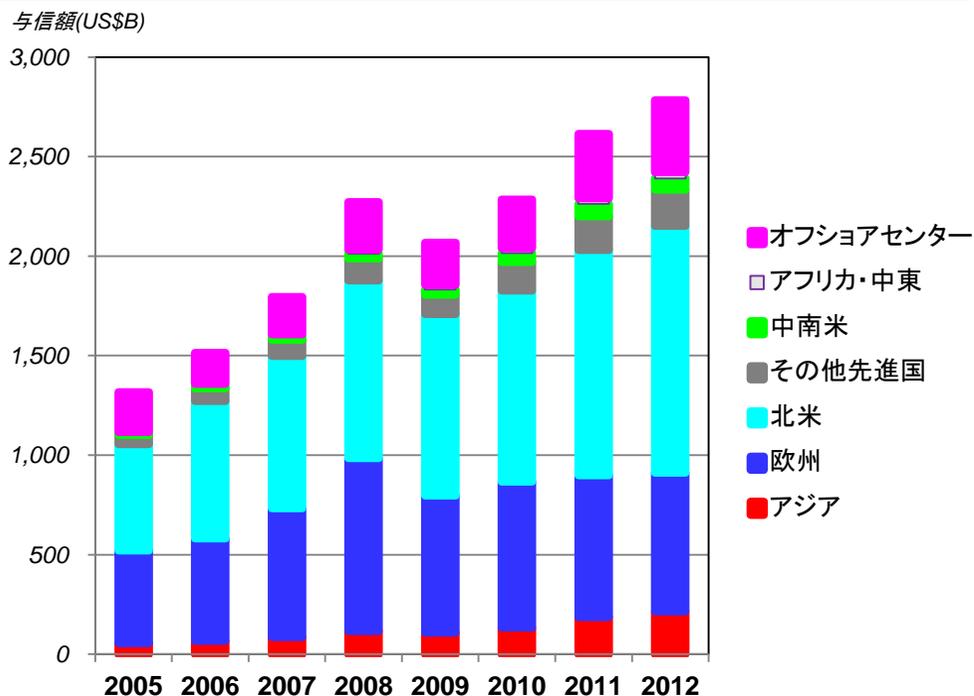
資料: BIS

(1) 2005年から2012年の3月末時点

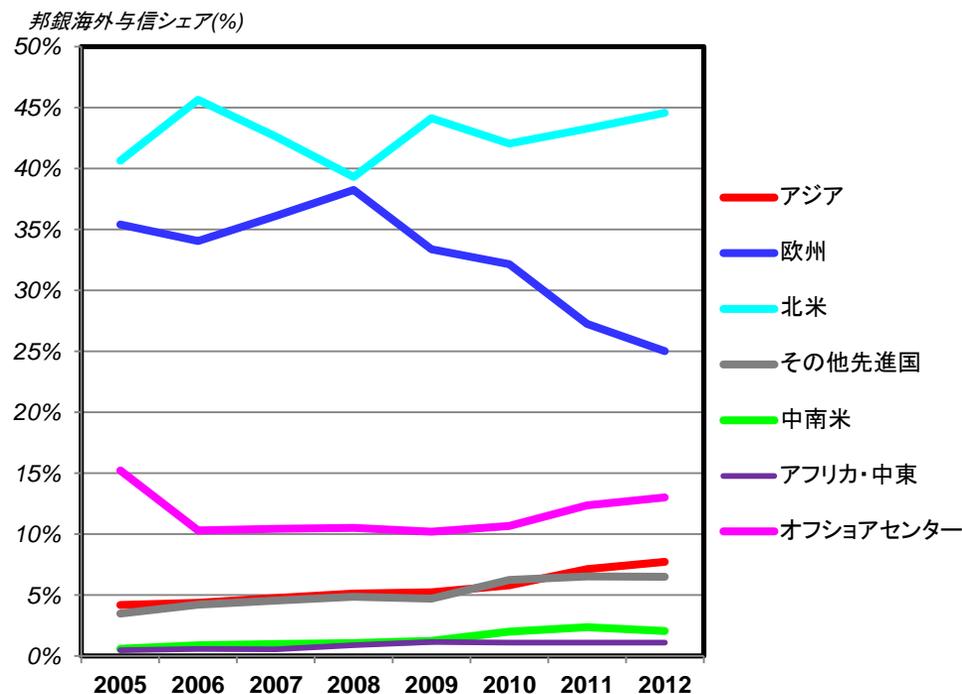
## ■ 日本の銀行の海外向け貸出の概観(1)

- ・邦銀主要行の貸出残高は、米国発の金融危機を経て、足許でむしろ伸びを高めてきたことが目立つ。
- ・地域別には、依然として米国向けの比率が高い一方で、欧州向けが顕著に低迷する一方、オフショア・センターを含む新興国向けが着実に伸びてきた。

日本の銀行による地域別海外向け貸出額 (1)



日本の銀行による地域別海外向け貸出シェア (1)



# 1. 地理的な特徴とその背景

資料: BIS

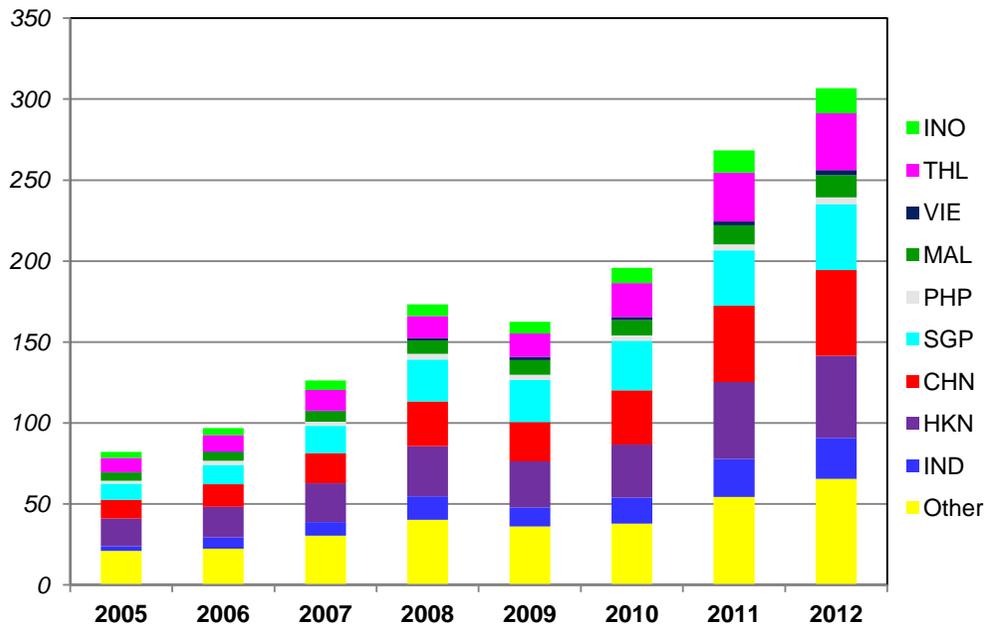
(1) 2005年から2012年の3月末時点

## ■ 日本の銀行の海外向け貸出の概観(2)

- ・ なかでも、対アジアについては、国際金融市場が全体的にストレスに晒される下で、残高の面ではなお小さいものの、明確な増加トレンドをたどってきた。
- ・ 国別には、シンガポールや香港といったオフショア・センターや中国向けのシェアが依然として高いものの、東南アジア諸国への伸びの高さが目立っている。

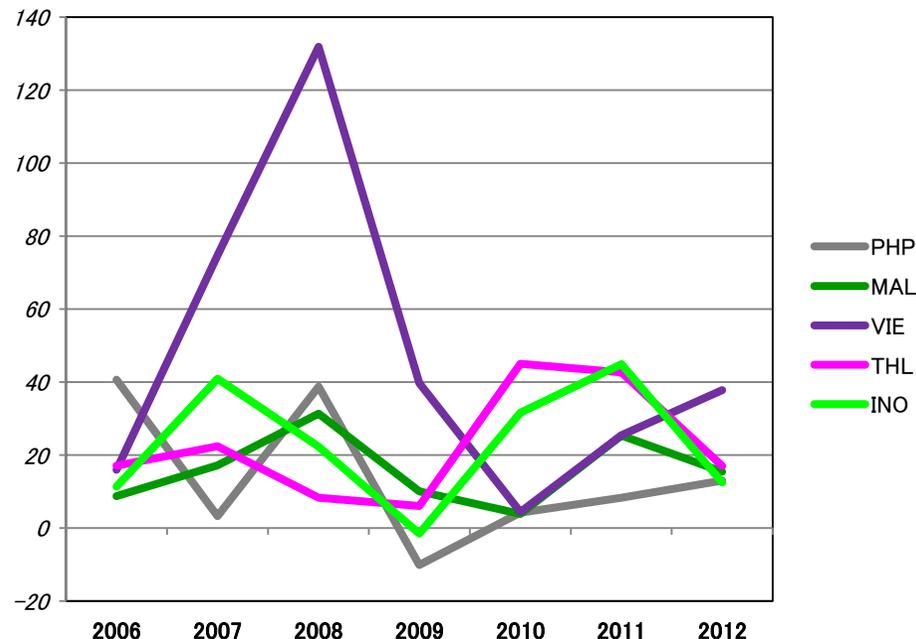
日本の銀行による対アジア向け国別貸出額 (1)

与信額(US\$B)



日本の銀行による対アジア向け国別貸出額伸び率 (1)

前年比(%)



# 1. 地理的な特徴とその背景

## ■ メガバンクによるアジア向け貸出の状況

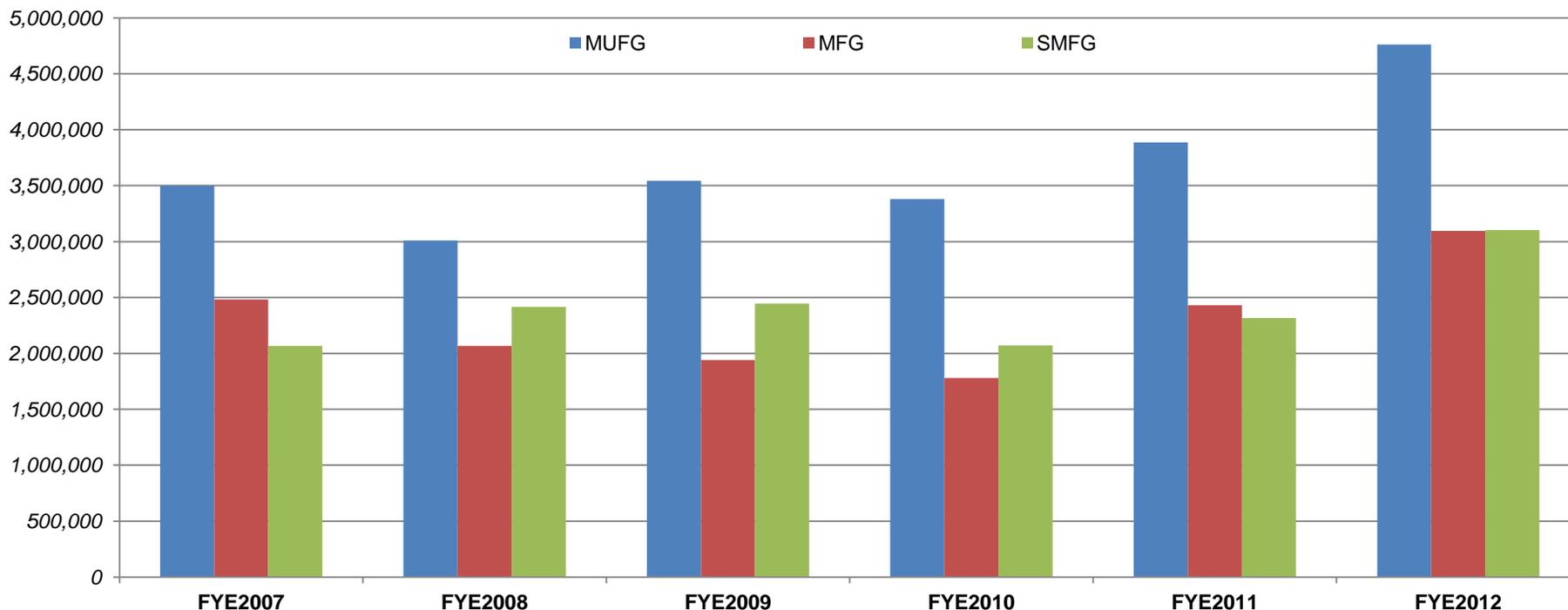
資料：各行ディスクロージャー資料

(1) 貸出金は銀行単体もしくは銀行単体+信託単体の末残で、現地法人等の貸出金残高は除いた数字

- メガバンクによるアジア向け貸出についても、同様に、2010年度に一服感を見せたものの、その後は明確な増加トレンドを辿っている。そのペースも、この2年間で概ね1.5倍増と高いものとなっている。

### メガバンクのアジア向け貸出<sup>(1)</sup>

貸出金額(百万円)



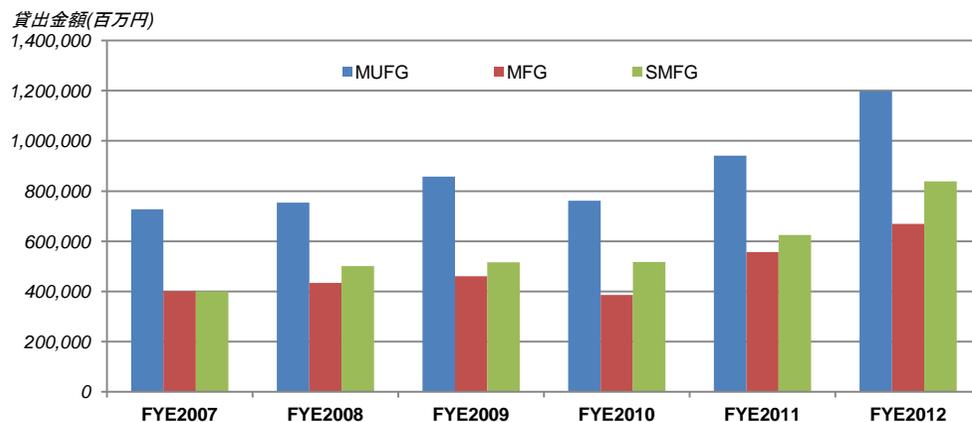
# 1. 地理的な特徴とその背景

## ■ メガバンクによるアジア主要国向け貸出の状況

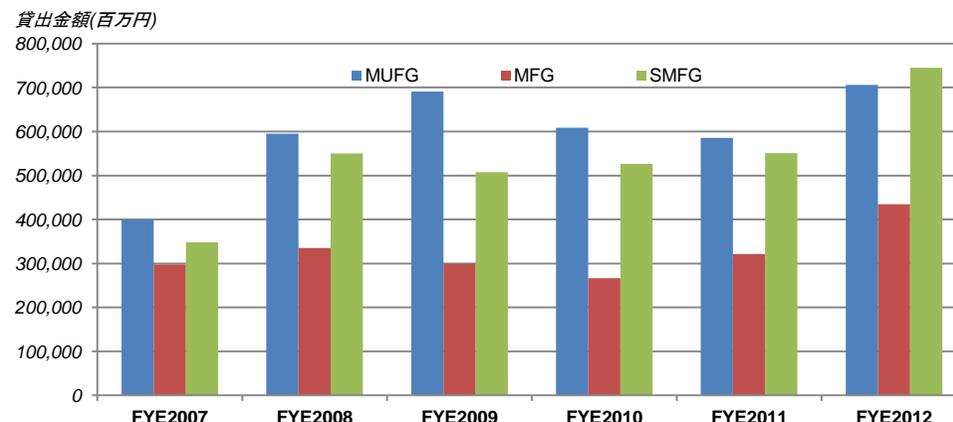
- ・ オフショアセンター向けの絶対額は大きいものの、新興国向け貸出の伸びの高さも目立つ。

資料：各行ディスクロージャー資料  
 (1) 貸出金は銀行単体もしくは銀行単体+信託単体の末残で、現地法人等の貸出金残高は除いた数字

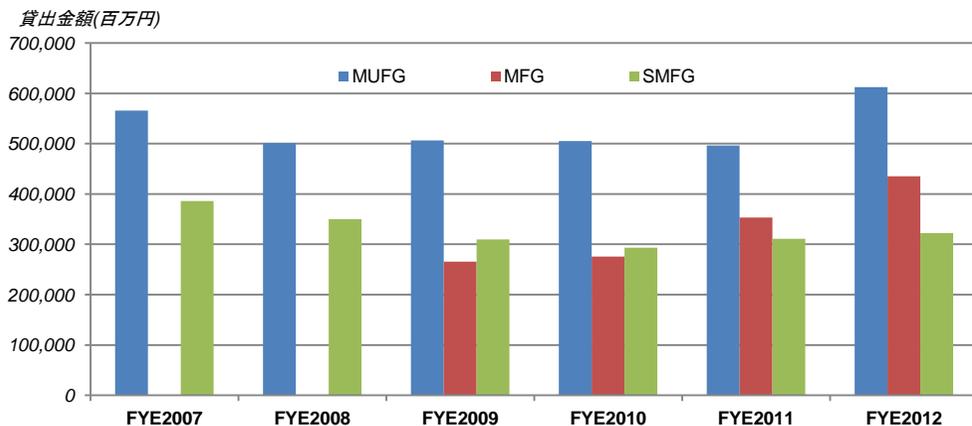
### 香港



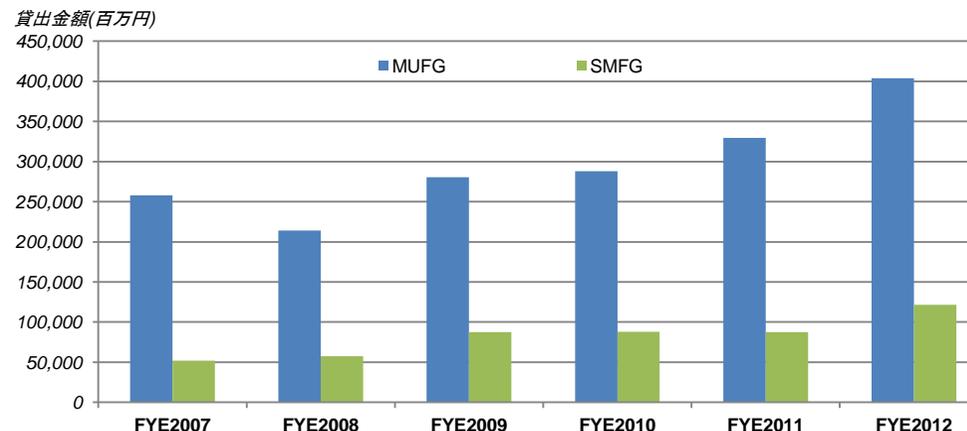
### シンガポール



### タイ



### インドネシア



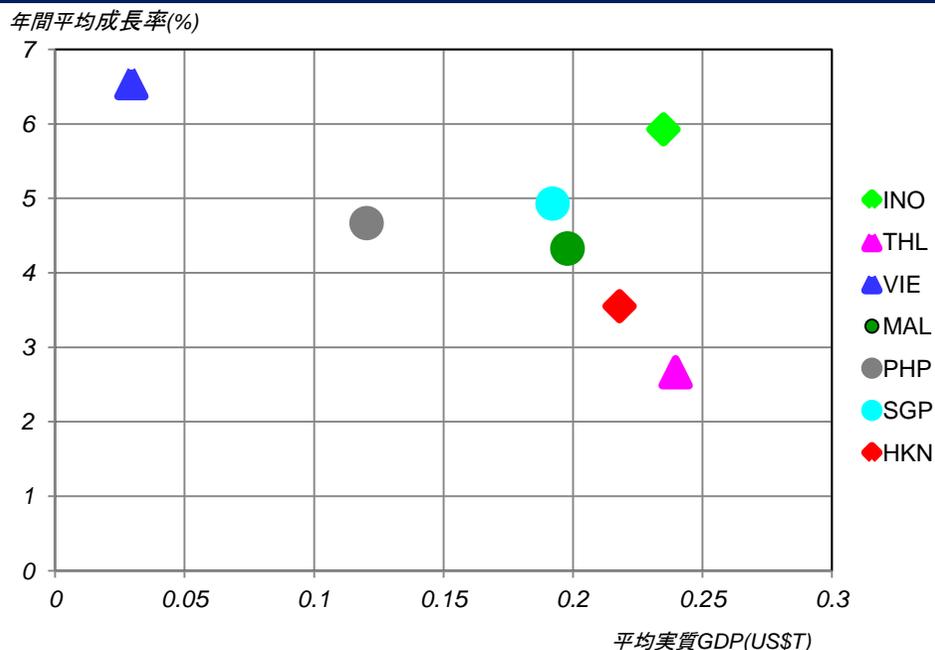
# 1. 地理的な特徴とその背景

## ■ 東南アジア諸国のマクロ金融環境(1)

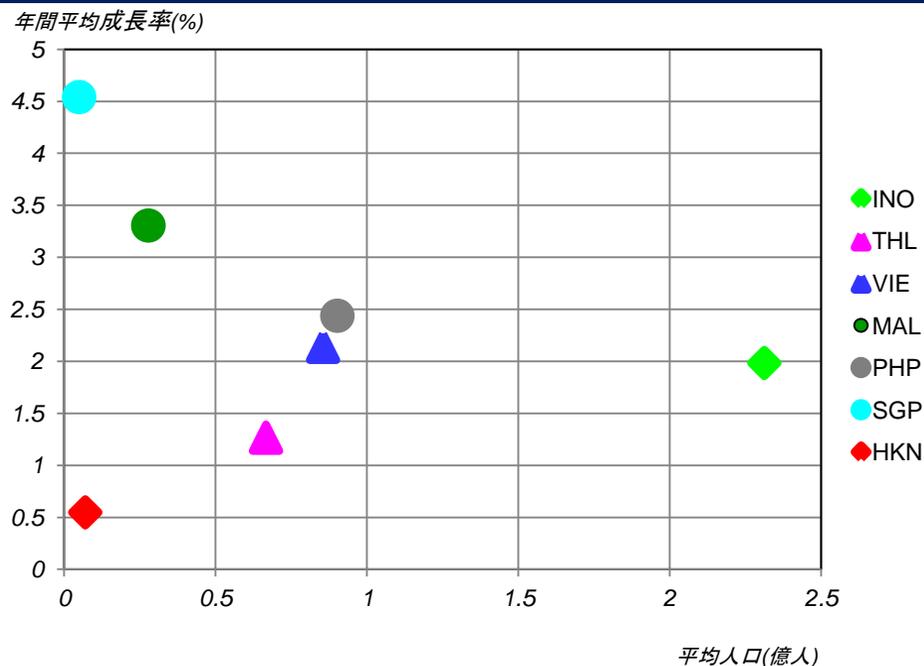
資料: ADB Economic Indicator  
 (1) 2006年から2011年の平均。シンガポールのみ2007年から2011年の平均

- ・ 東南アジアの新興国の経済成長率は総じて高いが、なかでもインドネシアは経済規模の大きさも併せ持っている。マレーシアがこれを追う一方、タイは規模は大きいものの成長率が鈍化し、フィリピンは規模で劣後している。ベトナムは急成長しているが、経済規模はまだ小さい。
- ・ 人口については、インドネシアの増加率は必ずしも高い訳ではないのに対し、ベトナムやフィリピンは人口でみた潜在的な市場規模は大きいと言える。

東南アジア諸国の実質GDPの規模と成長率(1)



アジア諸国の人口規模と労働力人口成長率(1)



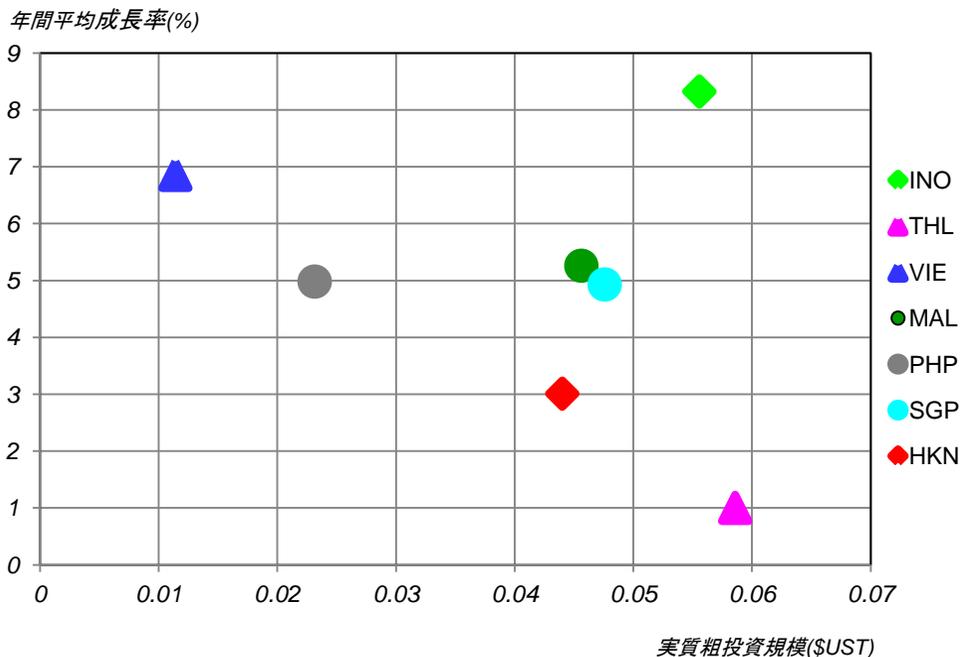
# 1. 地理的な特徴とその背景

## ■ 東南アジア諸国のマクロ金融環境(2)

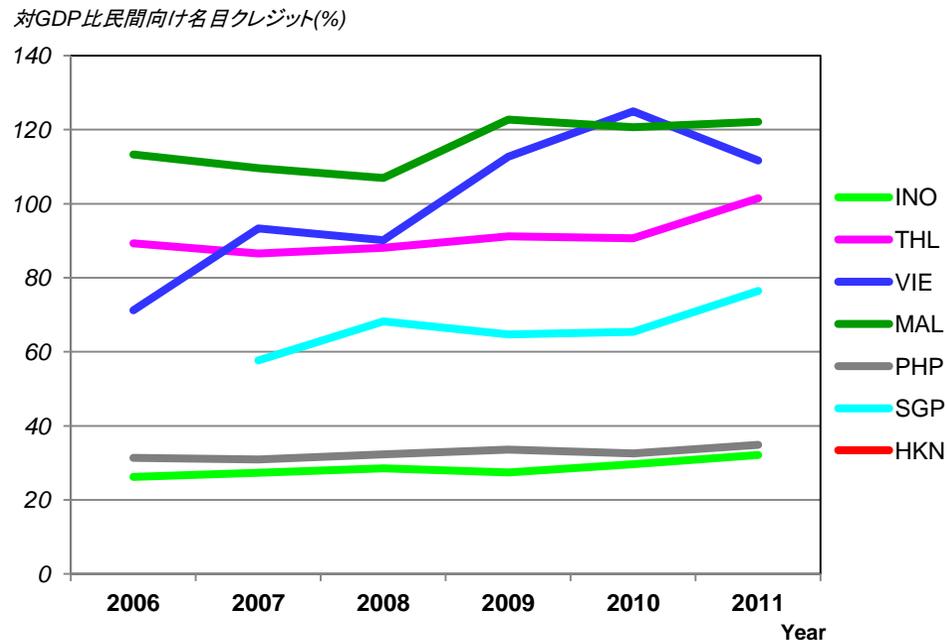
資料：ADB Economic Indicator  
 (1) 2006年から2011年の平均。シンガポールのみ2007年から2011年の平均

- ・ グロスの設備投資にはGDPの規模や成長率と類似したパターンが観察される。すなわち、インドネシアは規模と成長率の双方で優っている一方、タイとベトナムが規模と成長率で対角にある。
- ・ 一方、金融市場の相対規模として民間向けクレジットの対GDP比をみると、新興国の間で顕著な二分化がみられる。すなわち、マレーシアやベトナム、タイはいわばdebt financeのウエイトが高い。

アジア諸国の実質粗投資規模と成長率 (1)



アジア諸国の対GDP比民間向けクレジット(名目) (1)



資料: ADB Economic Indicator  
 (1) 2006年から2011年。シンガポールは2007年から2011年。タイ、日本、及びインドは2006年から2010年。貯蓄投資ギャップ = 名目貯蓄 - 名目投資

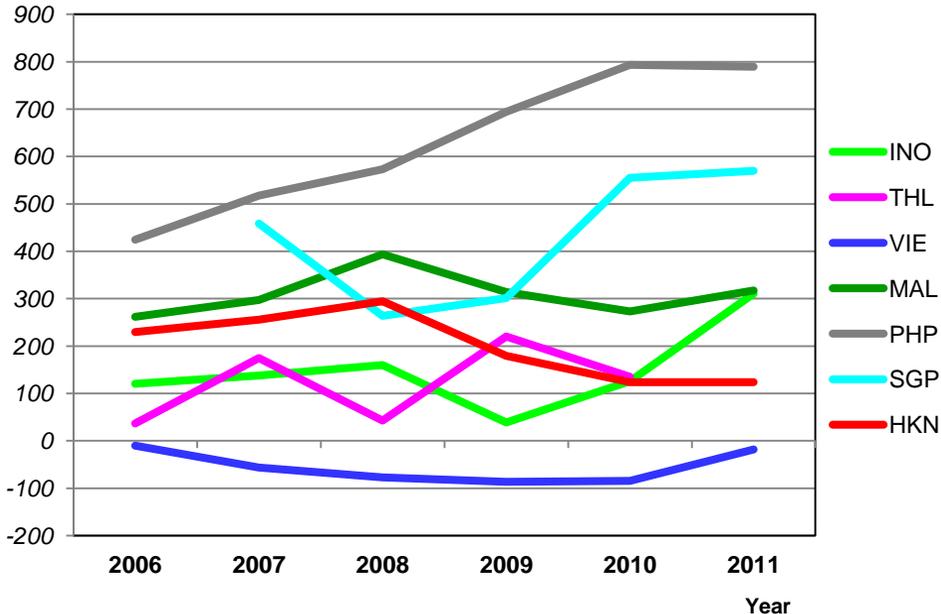
# 1. 地理的な特徴とその背景

## ■ 東南アジア諸国のマクロ金融環境(3)

- ・ 経常収支の頑健性の代替指標としてISギャップをみると、総じてみれば安定的に堅調に推移しており、アジア危機以前のような資金不足状況とは様変わりになっている。
- ・ なかでもフィリピンが水準と増加の双方の面で際立っているほか、インドネシアの上昇も目立つ。一方で、マレーシアは軟調であるほか、ベトナムは慢性的な資金不足の状況が窺われる。

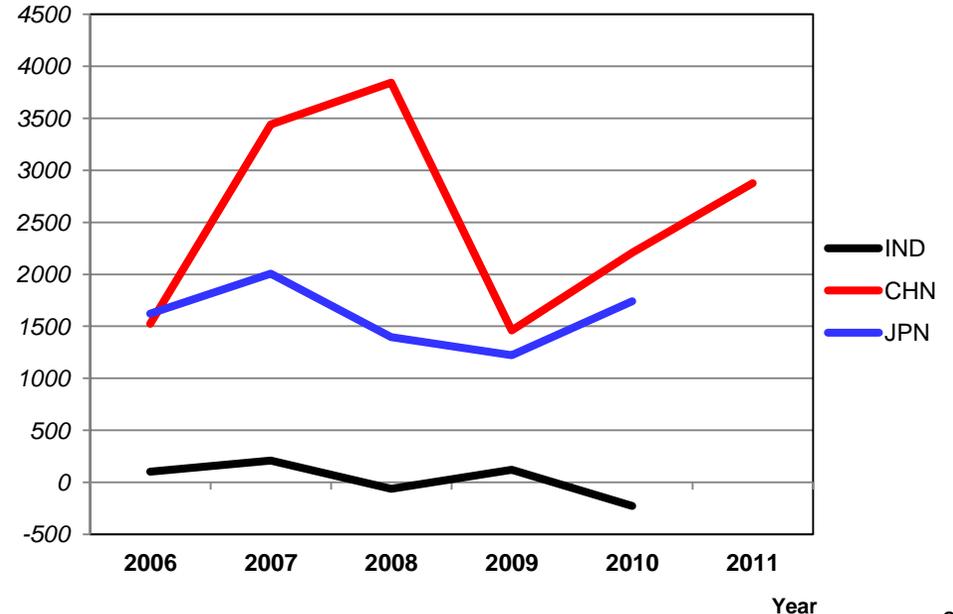
アジア諸国の名目貯蓄投資ギャップ<sup>(1)</sup>

名目貯蓄ギャップ(US\$B)



日中印の名目貯蓄投資ギャップ<sup>(1)</sup>

名目貯蓄ギャップ(US\$B)



# 1. 地理的な特徴とその背景

資料: ADB Economic Indicator

## ■ 東南アジア諸国のマクロ金融環境(4)

- ・ アジア危機以前の1990年と約20年後の姿を比較すると、輸出に関しては、アジア向けが顕著に増加した国が目立つ一方、北米向けは中国とベトナム以外は低下、欧州向けは総じて減少という傾向がみられる。
- ・ これに対し輸入に関しても、アジア向けが増加した国が目立つ一方、米国および欧州向けは減少しており、アジア諸国にとってのinputを域内で賄う構造が立ち上がりつつあることが推測される。

		アジア諸国の輸出シェア							
(%)		アジア	欧州	北米	中東	中南米	アフリカ	大洋州	その他
インドネシア	1990年	64.4	12.8	13.9	3	0.1	0.5	1.9	3.5
	2011年	66.8	10.9	9.1	3.2	1.4	2	3.1	3.4
タイ	1990年	37.9	25.3	25.3	5.4	0.2	2.1	1.9	2
	2011年	59.6	13.3	11.3	4.5	2.1	3	4	2.2
ベトナム	1990年	39.1	48.1	0.6	0.9	0	0.2	0.3	10.7
	2011年	47.5	21.9	21.2	1.6	1	1.4	3.5	1.9
シンガポール	1990年	45.8	17.2	23	2.6	0.4	1.4	3.3	6.4
	2011年	65.7	10.1	9.6	2	0.5	0.9	5	6.2
香港	1990年	42.2	20.2	27.2	1.6	0.5	1.5	1.8	5
	2011年	69.3	12.1	11.4	1.7	1	0.5	1.4	2.7
中国	1990年	68.3	14.7	10	2.3	0.4	1.8	0.9	1.5
	2011年	41.2	21.7	20.8	4.7	3.9	3.4	2	2.3

		アジア諸国の輸入シェア							
(%)		アジア	欧州	北米	中東	中南米	アフリカ	大洋州	その他
インドネシア	1990年	43.6	22.4	13.7	5	2	0.7	6	6.6
	2011年	67.2	9	7.6	5.8	2.3	2.1	3.5	2.4
タイ	1990年	53.4	19.7	12.1	4.1	1.8	0.8	2	6.1
	2011年	54.9	14	6.7	13.3	1.6	1	3.8	4.5
ベトナム	1990年	34.1	21.3	0.4	0	0	0.1	0.4	43.8
	2011年	74.6	7.5	4.1	1.7	1.8	0.3	2.2	7.9
シンガポール	1990年	47.7	15.8	16.8	11	0.9	0.4	2.2	5.1
	2011年	50	15.2	12.3	11.8	1.7	0.3	1.3	7.4
香港	1990年	66.7	12.4	8.6	0.8	0.7	0.6	1.1	9.1
	2011年	73.6	10.4	6.4	1.6	0.6	0.3	0.6	6.4
中国	1990年	48.6	24.1	15.8	0.9	2	0.6	2.8	5.2
	2011年	35.4	15.5	8.9	7.9	5.9	4.2	5	17.1

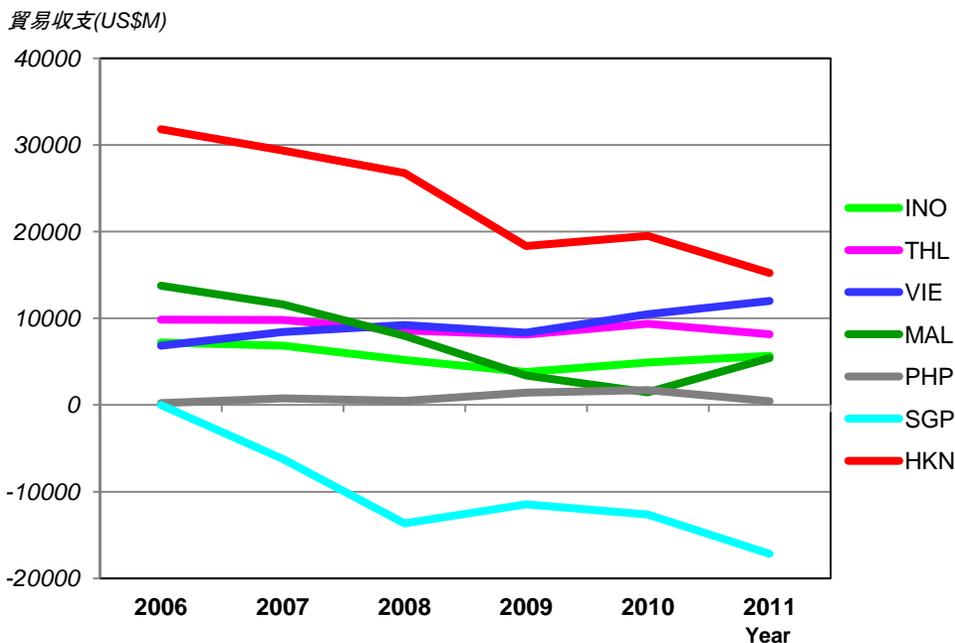
# 1. 地理的な特徴とその背景

## ■ 東南アジア諸国のマクロ金融環境(5)

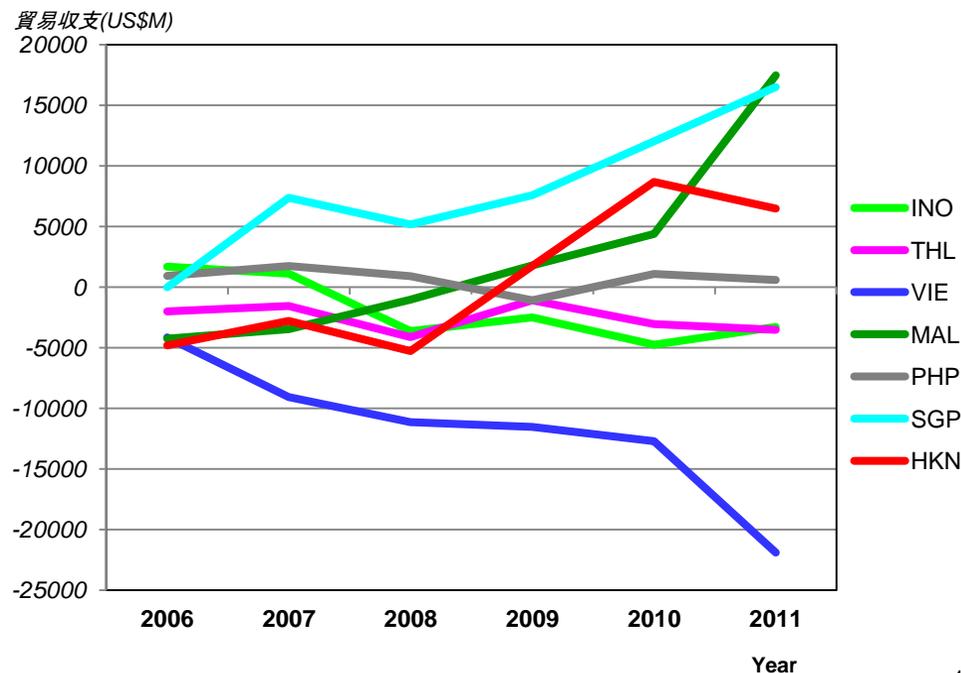
資料：ADB Economic Indicator  
(1) 2006年から2011年

- こうしたパターンの結果としての対米貿易収支をみても、香港やシンガポールなどのオフショア・センターの変化が目立つ一方で、新興国には顕著な変化は窺われない。
- 中国との貿易収支をみると、オフショア・センターおよびマレーシアが黒字を急速に増やしている一方、タイ、インドネシアが赤字であり、ベトナムの対中赤字は顕著に増加してきており、中国との経済的な分業関係の変化が示唆される。

アジア諸国の対米貿易収支(名目) (1)



アジア諸国の対中貿易収支(名目) (1)



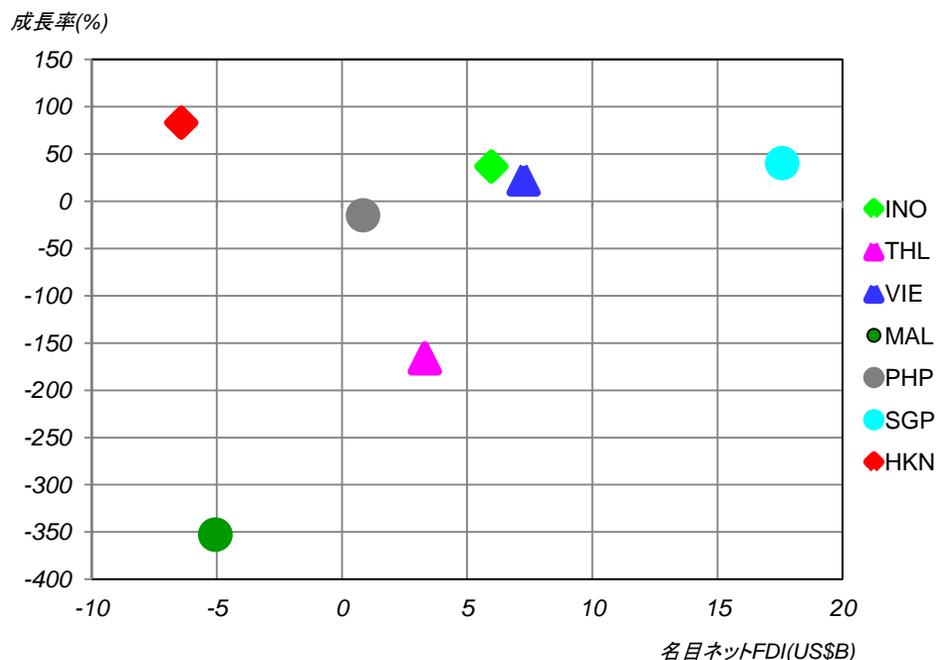
# 1. 地理的な特徴とその背景

資料: ADB Economic Indicator  
(1) 2007年から2011年の平均

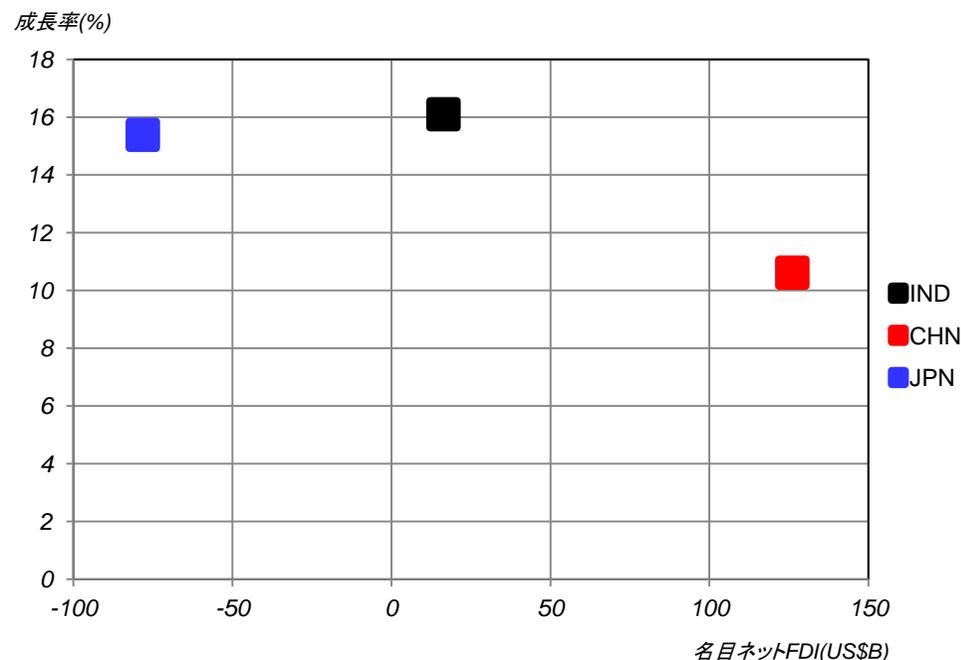
## ■ 東南アジア諸国のマクロ金融環境(6)

- ・ 東南アジアに関する国際資本フローの指標としてFDIの状況を見ると、新興国の中ではインドネシアとベトナムが、対内投資金額とその成長率の双方の面で目立っている。
- ・ これに対し、タイやマレーシアは、少なくとも足許においては停滞感が窺われる。

### アジア諸国の名目ネットFDIと成長率(1)



### 日中印の名目ネットFDIと成長率(1)



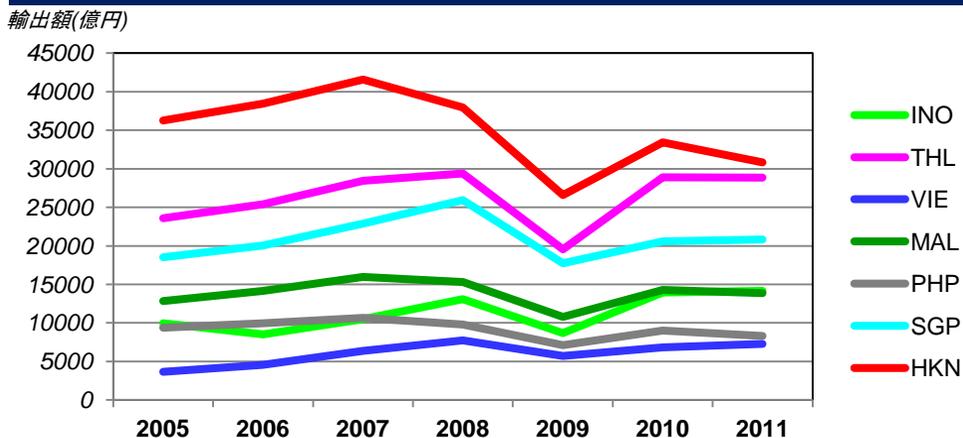
# 1. 地理的な特徴とその背景

## ■ 日本との金融経済関係(1)

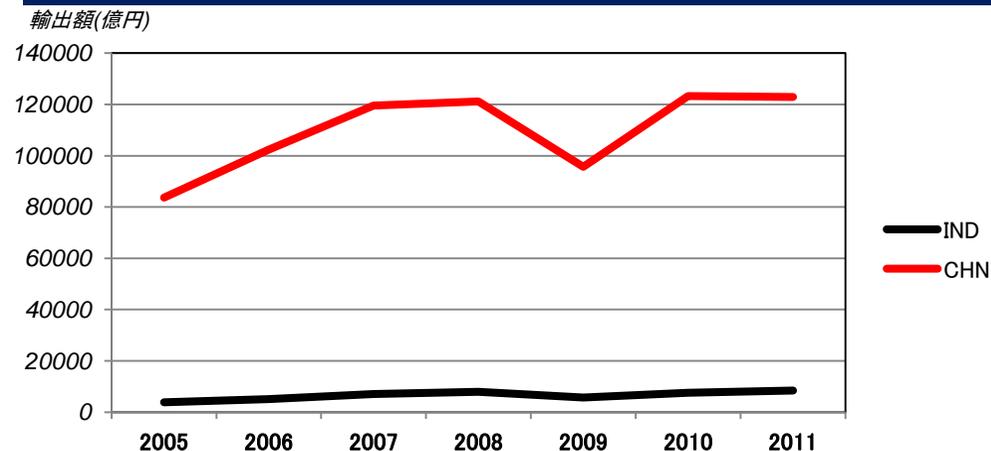
資料:財務省・日本銀行

- ・ 新興国では、輸出はタイやマレーシア、輸入はインドネシア、タイ、マレーシアのウエイトが 引続き高い。

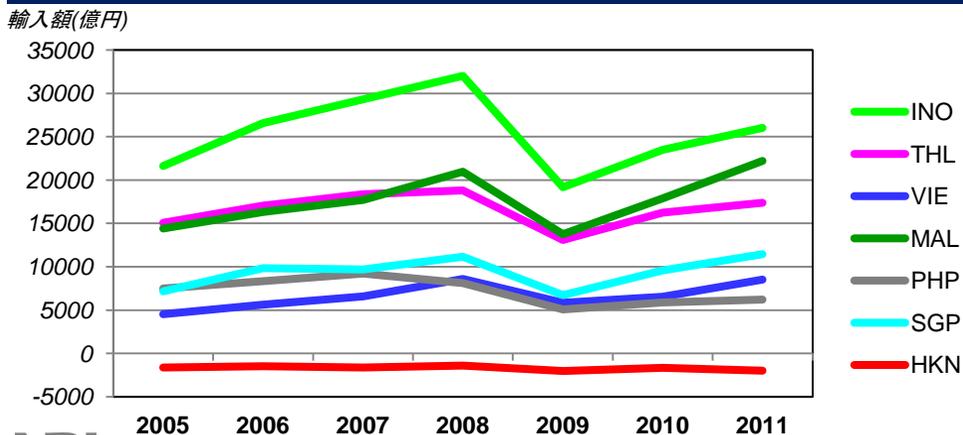
### 日本の輸出額国別推移



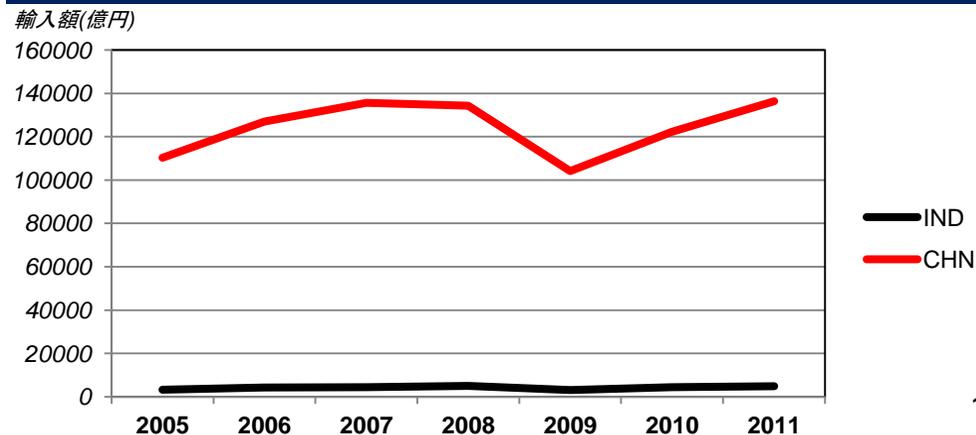
### 日本の輸出額国別推移



### 日本の輸入額国別推移



### 日本の輸入額国別推移



# 1. 地理的な特徴とその背景

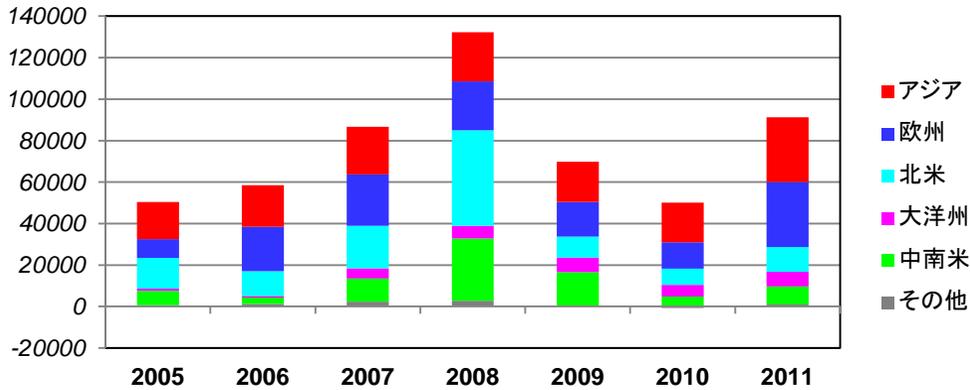
## ■ 日本との金融経済関係(2)

資料:財務省・日本銀行

- 金融危機後はアジア向けのウエイトが上昇し、タイやインドネシア向けが高水準となっている。

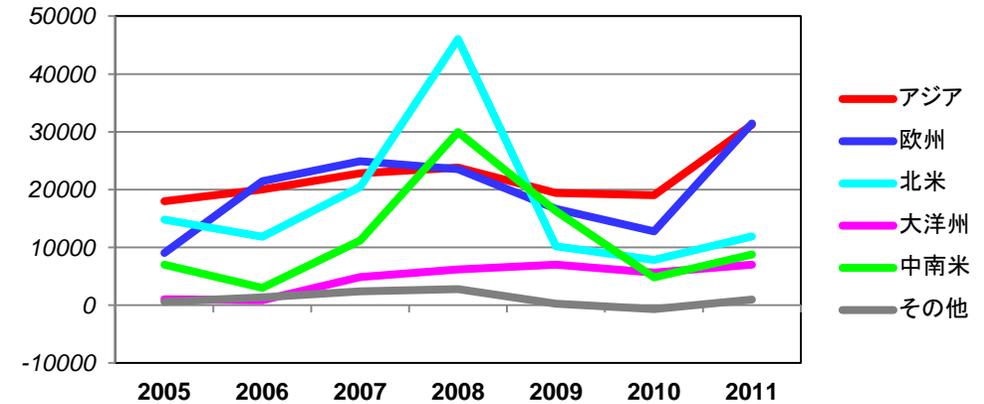
### 日本の名目ネットFDI推移

名目ネットFDI(億円)



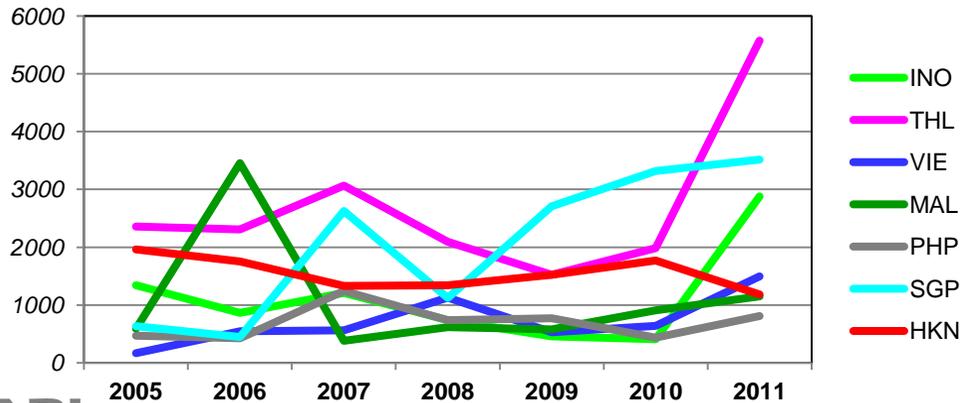
### 日本の名目ネットFDI地域別推移

名目ネットFDI(億円)



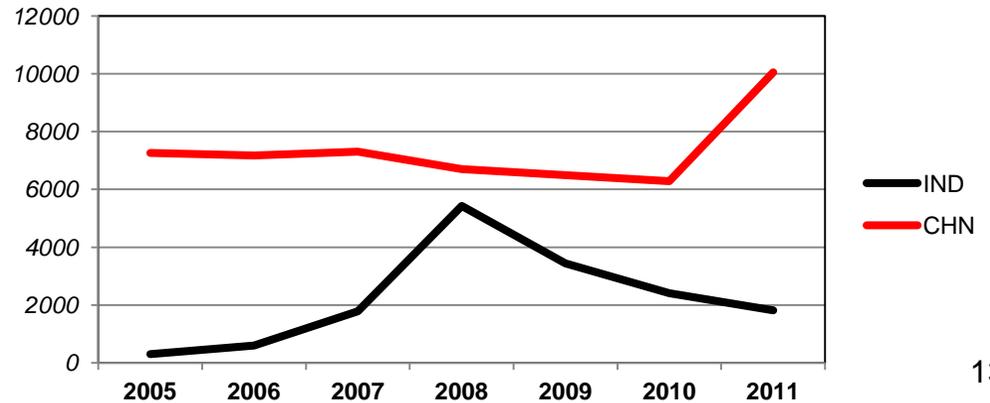
### 日本の名目ネットFDI国別推移

名目ネットFDI(億円)



### 日本の名目ネットFDI国別推移

名目ネットFDI(億円)

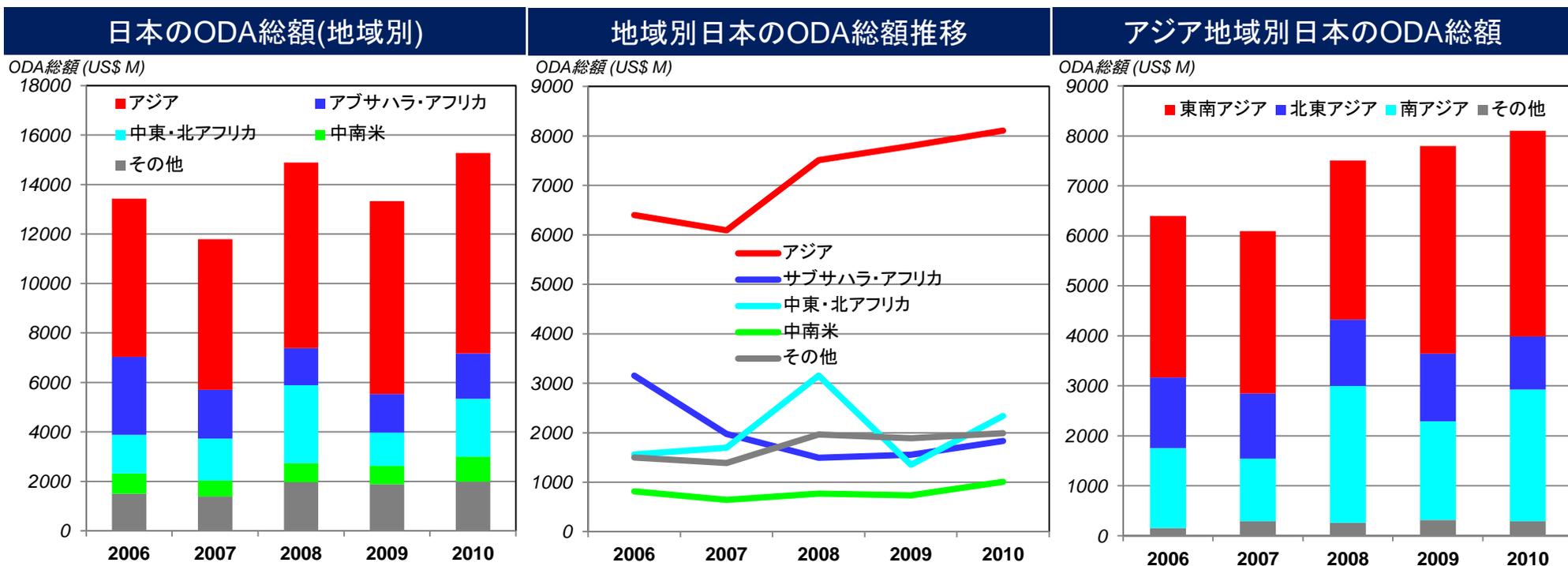


# 1. 地理的な特徴とその背景

## ■ 日本との金融経済関係(3)

資料:外務省

- 日本の銀行にとって潜在的なビジネスを提供するODAは、アジア向けのシェアが際だって高いだけでなく、なかでも東南アジア向けのシェアが上昇しつつある(北東アジアで「卒業国」が生じたことが背景)。



---

## 2. ビジネスの特徴とその背景

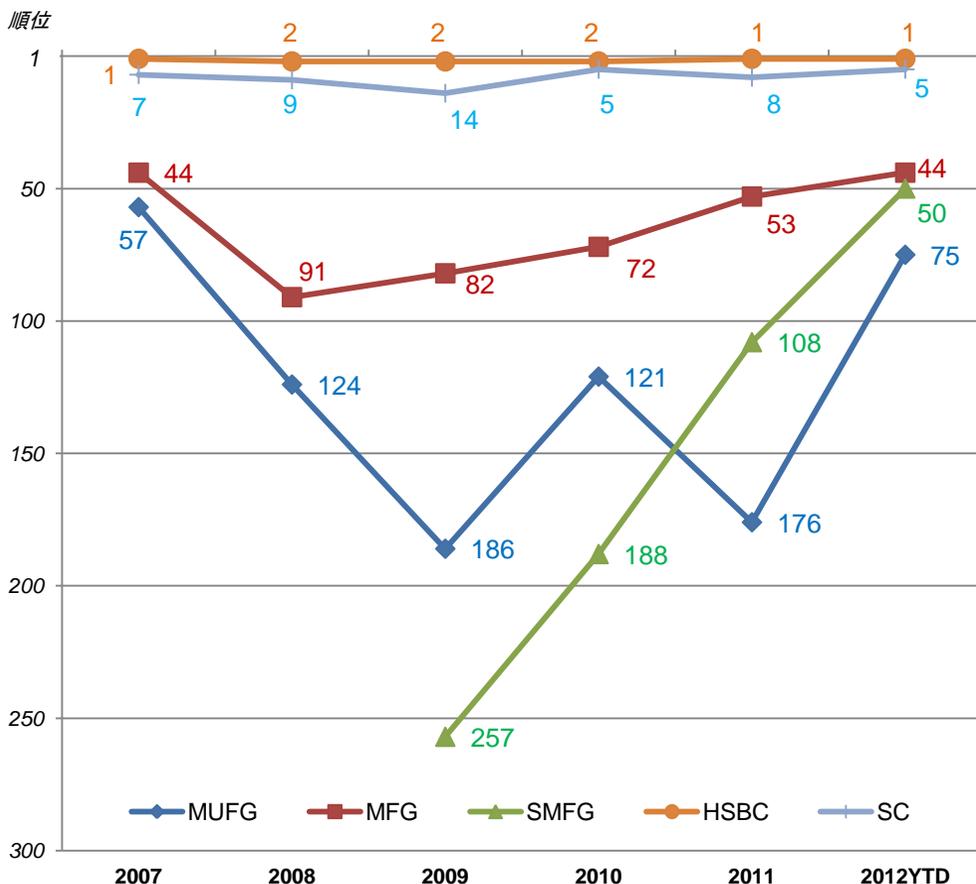
## 2. ビジネスの特徴とその背景

### ■ メガバンクのアジアビジネスでのプレゼンス(1)

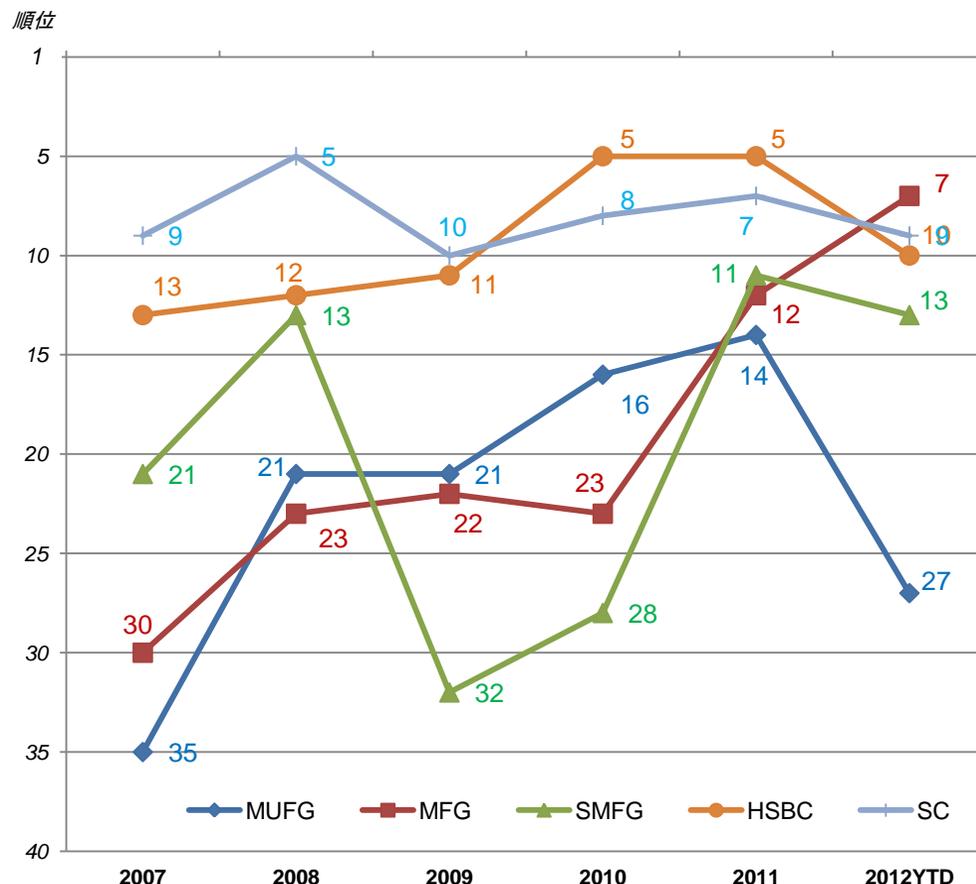
- メガバンクは、法人向けdebtビジネスにおける地位を急速に上昇させてきた。なかでも、シンジケート・ローンに関しては、トップ10を窺う状況となっている。

資料: Thomson One  
 \*リーゲータブルの対象国はAPAC(日本除く)  
 (1) ブックランナー・ベース

アジアにおけるDCMリーゲータブルの順位



アジアにおけるシ・ローンリーゲータブルの順位<sup>(1)</sup>



## 2. ビジネスの特徴とその背景

### ■ メガバンクのアジアビジネスでのプレゼンス(2)

- メガバンクは、プロジェクト・ファイナンスのFA業務においても地位を高めてきており、2007年以降で見ても上位25社以内に度々入って来ている。

アジアにおけるProject Financeリーグテーブルの順位<sup>(1)(2)</sup>



アジアにおけるProject Finance リーグテーブル<sup>(1)</sup>

APAC ex-JapanのProject Financeリーグテーブル(2007-2012Julの合計)

Rank	FA	Value (\$M)	Mkt Share(%)	# of Project
1	Macquarie Group	111,083.41	3.2	39
2	State Bank of India	110,642.37	3.2	175
3	Ernst & Young LLP	68,608.91	2.0	22
4	Goldman Sachs & Co	57,270.99	1.7	6
5	RBS	55,928.02	1.6	14
6	KPMG	51,971.91	1.5	13
7	Citi	42,112.88	1.2	7
8	Lazard	39,742.38	1.2	11
9	Investec	39,207.40	1.1	1
10	JP Morgan	38,942.97	1.1	9
11	Credit Agricole CIB	36,350.00	1.1	4
12	Mizuho Financial Group	35,464.00	1.0	4
13	Standard Chartered PLC	32,521.42	0.9	18
14	Sumitomo Mitsui Finl Grp	31,204.67	0.9	12
15	ANZ Banking Group	31,149.82	0.9	13
16	Mitsubishi UFJ Finl Grp	21,877.15	0.6	4
17	PricewaterhouseCoopers	19,957.29	0.6	26
18	Rothschild	18,449.28	0.5	7
19	Societe Generale	18,384.74	0.5	4
20	Bank of America Merrill Lynch	17,627.13	0.5	5
21	Morgan Stanley	17,040.45	0.5	7
22	Greenhill & Co, LLC	16,352.15	0.5	1
22*	Taylor DeJongh	16,352.15	0.5	1
24	Credit Suisse	16,068.54	0.5	6
25	HSBC Holdings PLC	13,211.88	0.4	15
-	Total	3,442,852.81	100.0	2,780

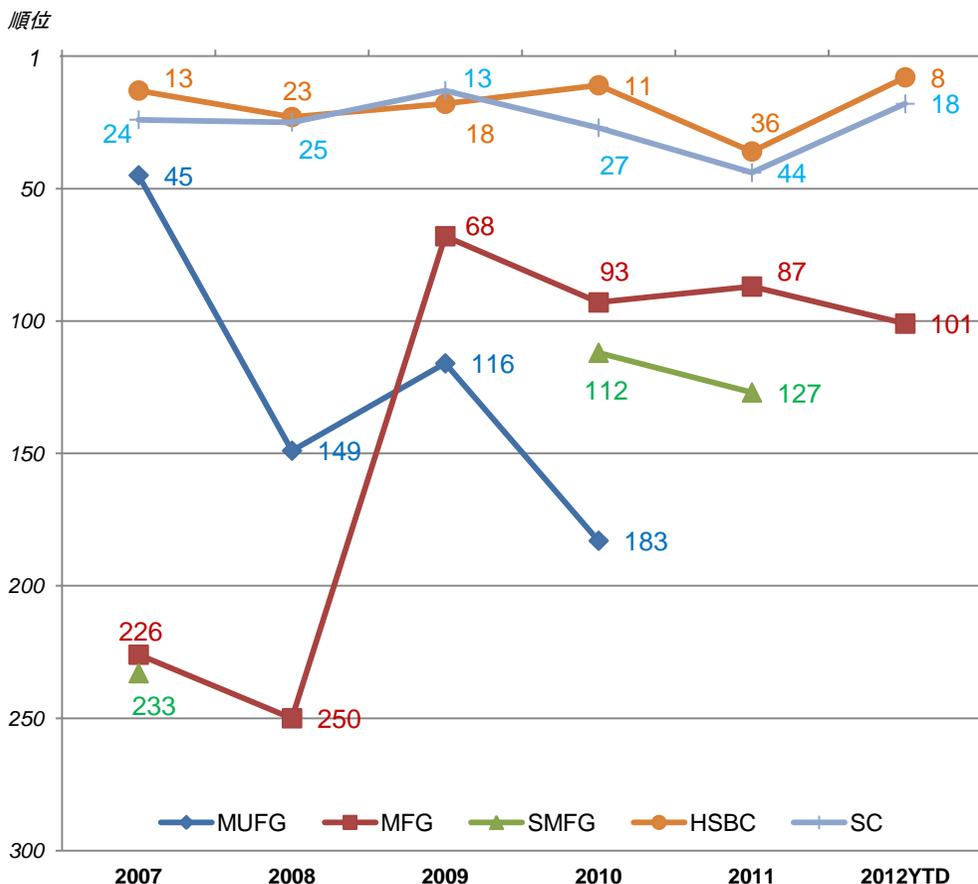
## 2. ビジネスの特徴とその背景

### ■ メガバンクのアジアビジネスでのプレゼンス(4)

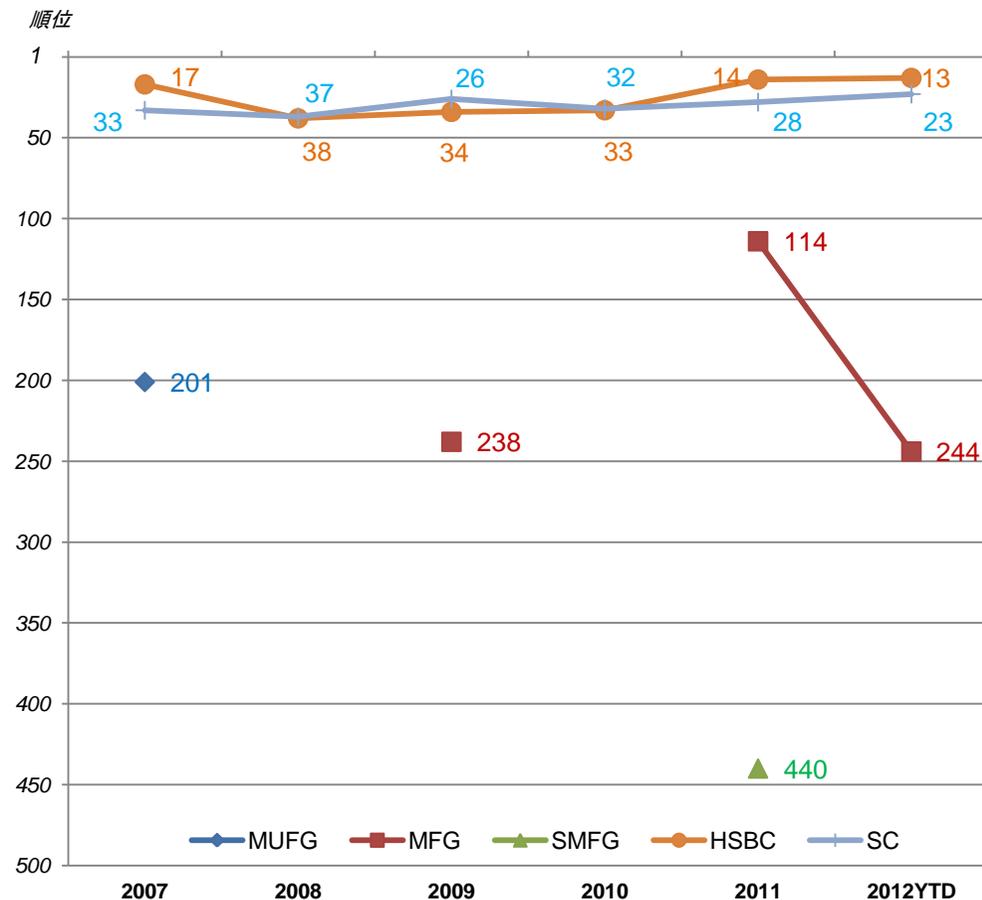
資料: Thomson One  
1) ターゲット国がAPAC(ex-Japan)のM&A

- ・ M&Aや法人向けequityビジネスにおけるメガバンクの地位は、なお低位に止まっている。

#### アジアにおけるM&A<sup>(1)</sup>リーグテーブルの順位



#### アジアにおけるECMリーグテーブルの順位

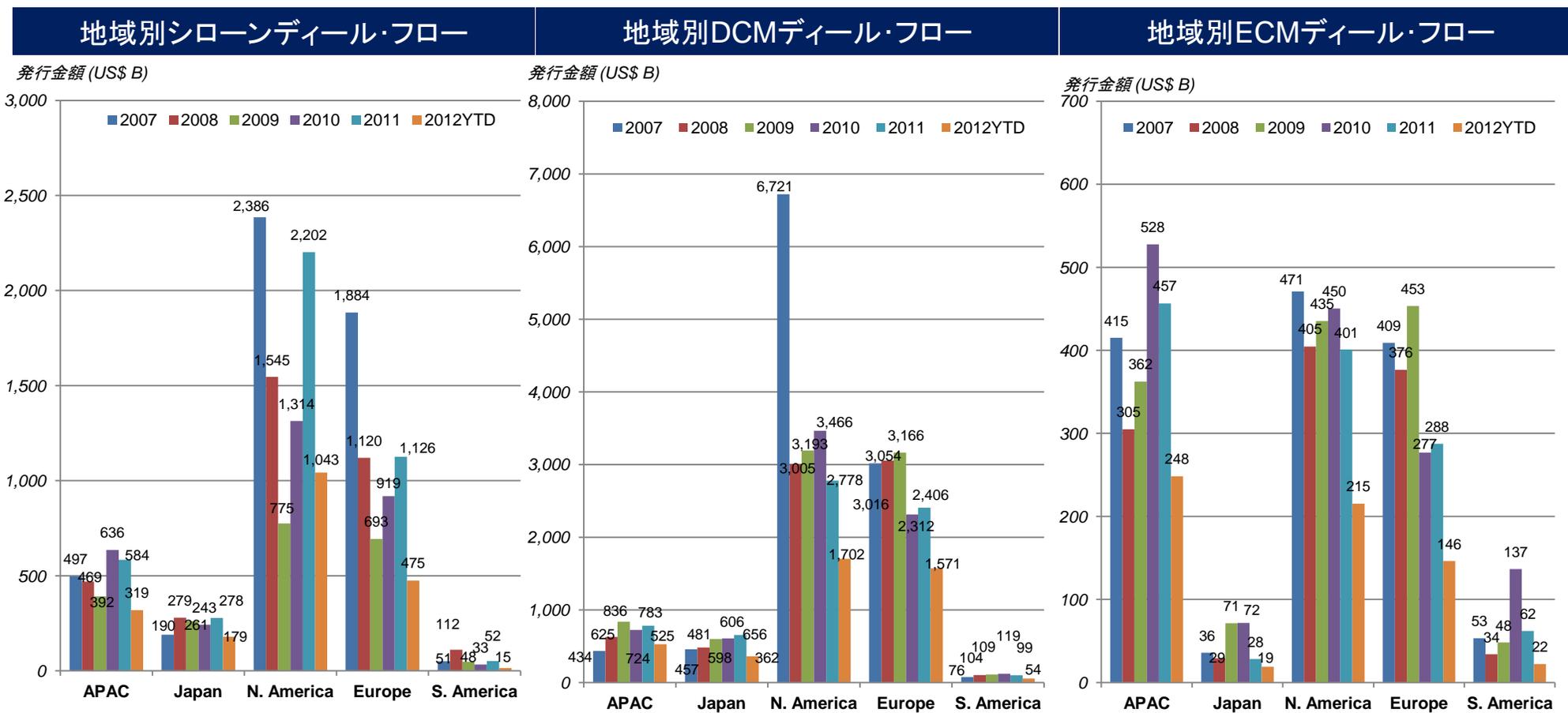


## 2. ビジネスの特徴とその背景

資料: Thomson One

### ■ 主要市場別のディール・フロー

- アジアにおけるシンジケート・ローンを含むdebtファイナンスの市場規模は、まだ米欧には大きく及ばない水準にある。Equityファイナンスの規模は大きいが、特定市場への偏りがみられる。



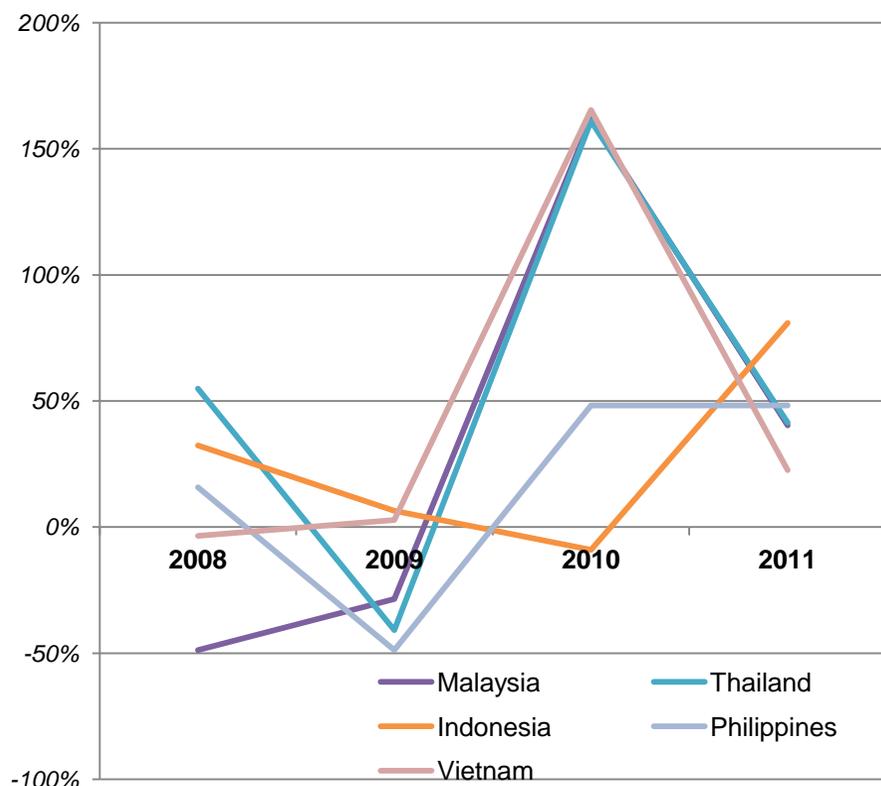
## 2. ビジネスの特徴とその背景

資料: Thomson One

### ■ アジアの新興国におけるディール・フロー: シンジケート・ローン

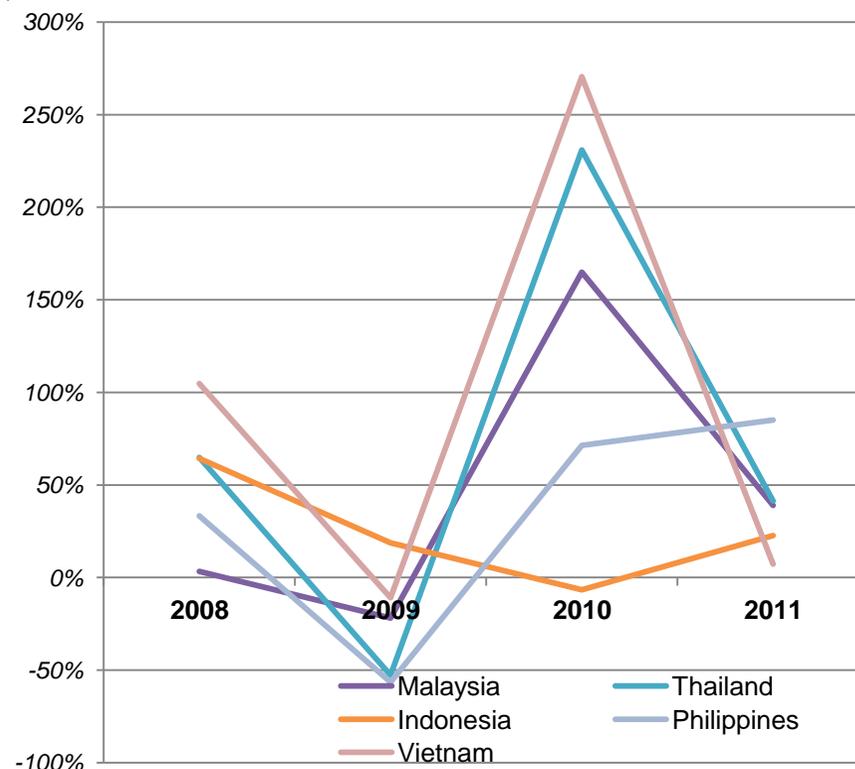
- アジアの新興国について、2008年の金融危機以降のシ・ローンの規模は概ね大きく成長。特に2010年に関しては、インドネシアを除く主要東南アジア新興国で高い成長率を示した。

アジアの新興国におけるシ・ローンのディール・フローの伸び率



うち Non-Leveraged Loan

成長率(YoY)



## 2. ビジネスの特徴とその背景

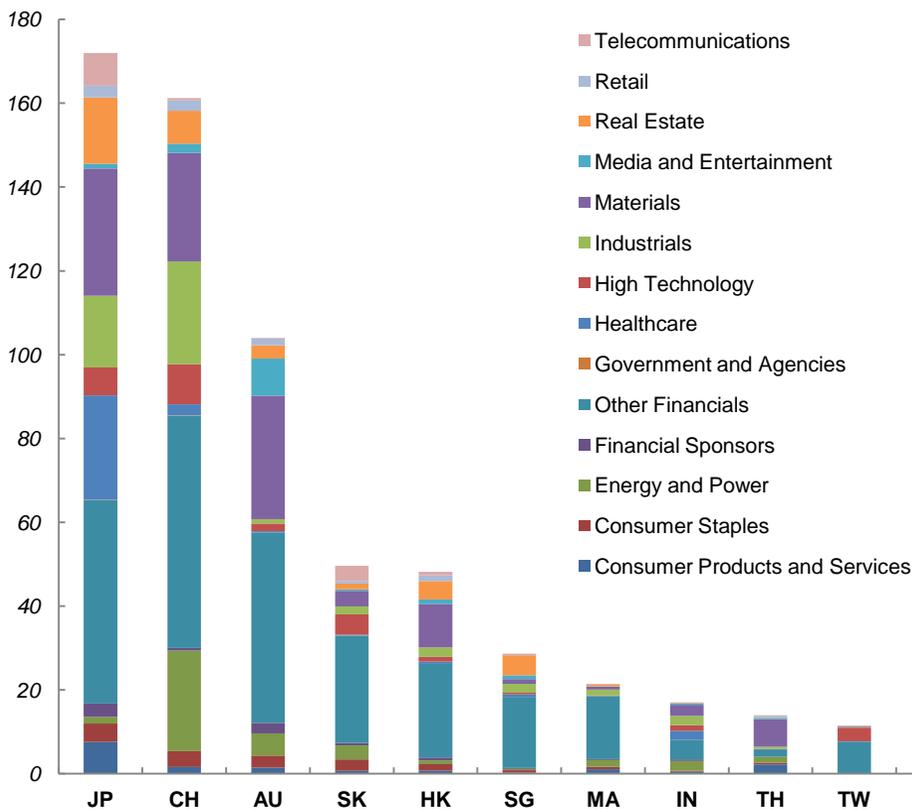
資料: Thomson One

### ■ アジアにおけるディール・フロー: M&A(国別)

- ・ M&Aに関しても、国別には日中豪の3カ国が突出して大きい。新興国のフローはオフショア・センターをさらに下回り、まだ発展途上の段階にある。

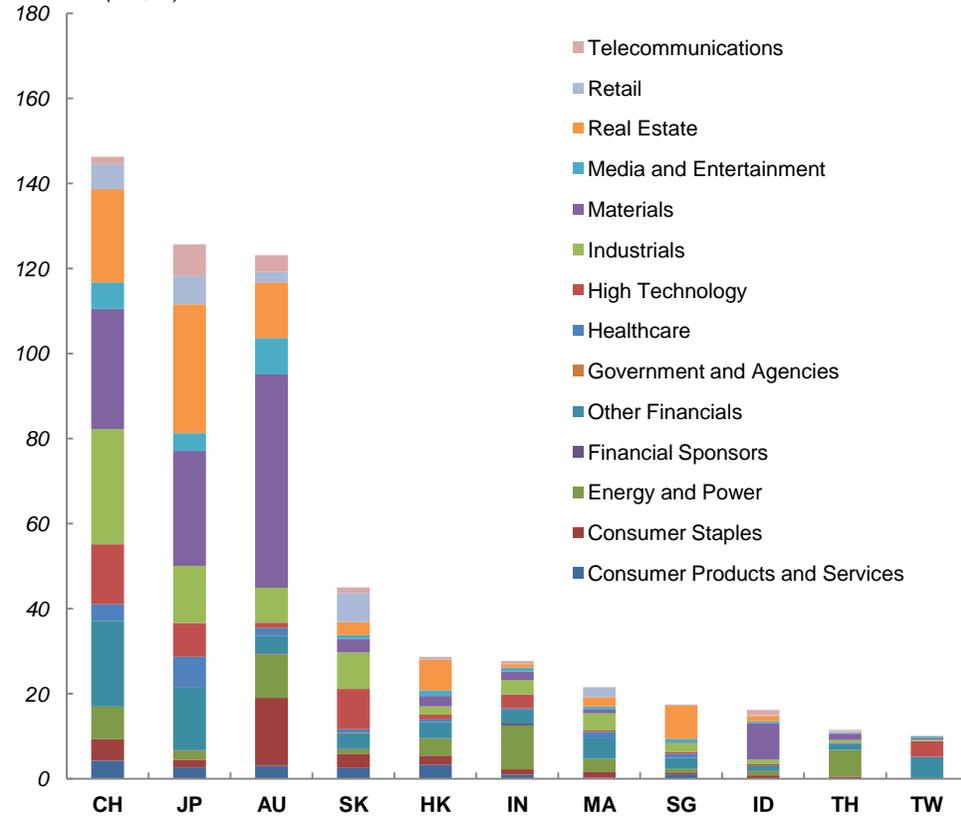
アジアにおけるM&A金額(買収国別・2011年)

取引金額 (US\$ B)



アジアにおけるM&A金額(被買収国別・2011年)

取引金額 (US\$ B)



## 2. ビジネスの特徴とその背景

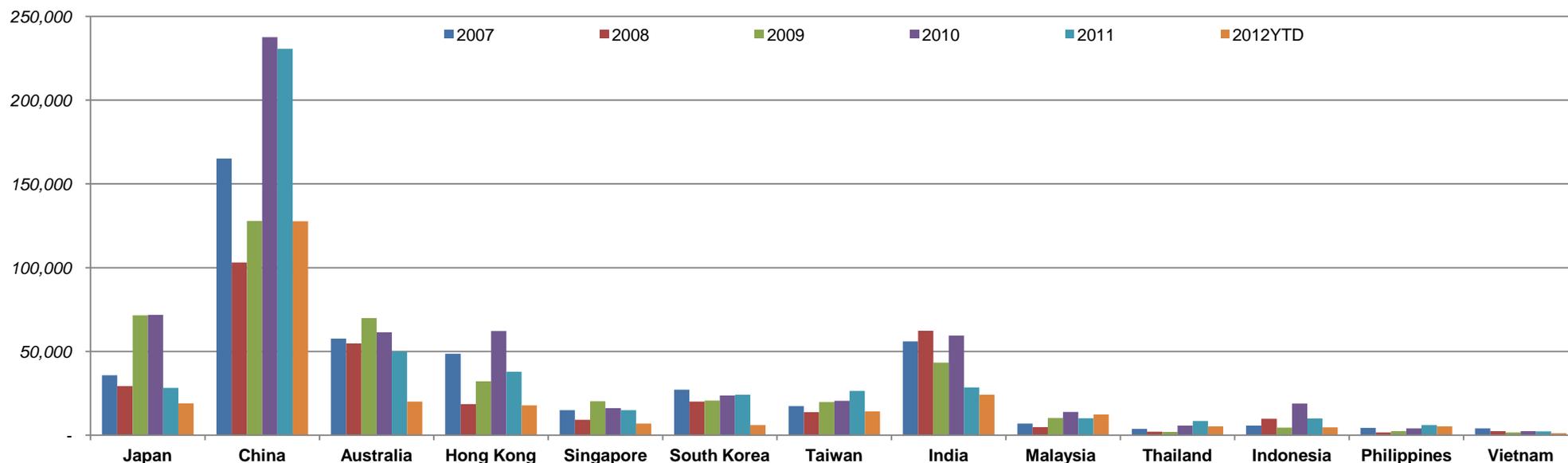
資料: Thomson One

### ■ アジアの国別のディール・フロー: ECM

- ECMの場合は、DCMのパターンとは若干異なり、中国と香港のウエイトが大きいことが目立つ。この間、日本の市場規模はインド並みになっている。

#### アジアECM国別ディール・フロー

発行金額 (US\$ M)



## 2. ビジネスの特徴とその背景

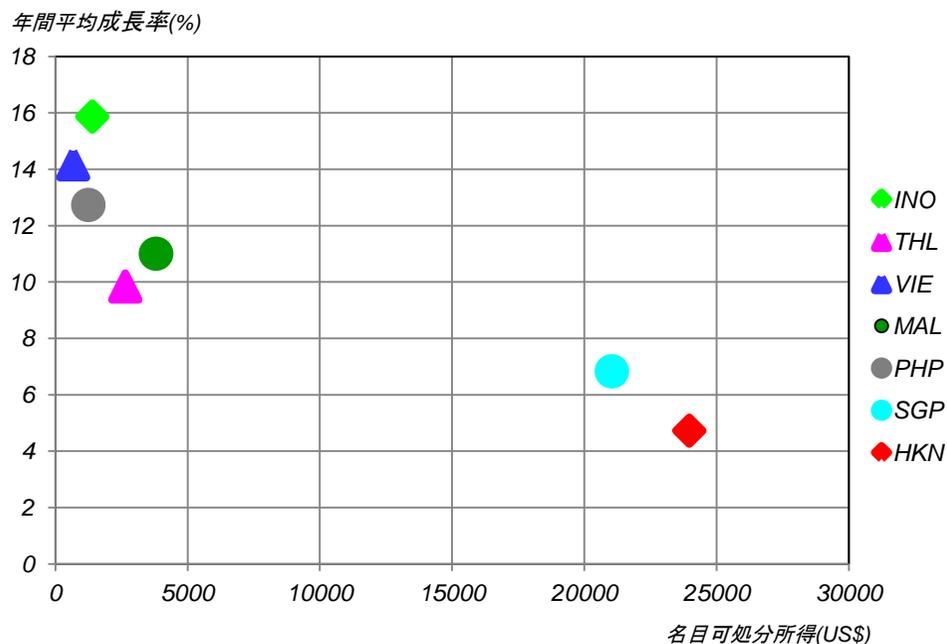
### ■ 東南アジア諸国のマクロ金融環境(1)

資料: ADB Economic Indicator  
(1) 2005年から2010年の平均

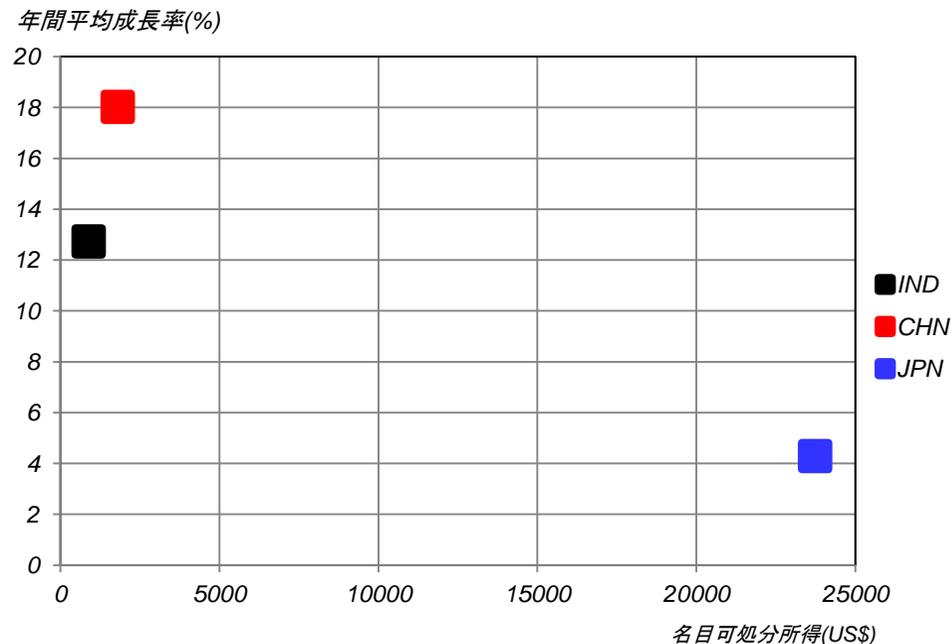
- 東南アジア諸国の可処分所得は依然として低位ではあるが、足許でも平均して10%台前半のような高い伸びを続けるという特徴を共有している。ただし、こうした特徴は中国やインドのような大国においても、共通して観察される。

ー日本とオフショア・センターは正反対の特徴を共有している。

#### アジア諸国の名目可処分所得と成長率 (1)



#### 日中印の名目可処分所得と成長率 (1)



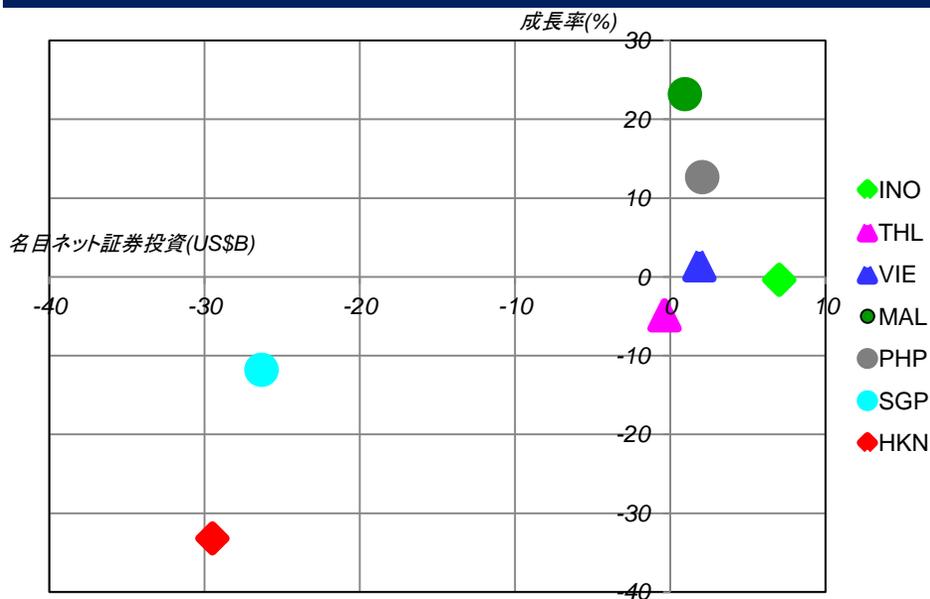
## 2. ビジネスの特徴とその背景

### ■ 東南アジア諸国のマクロ金融環境(2)

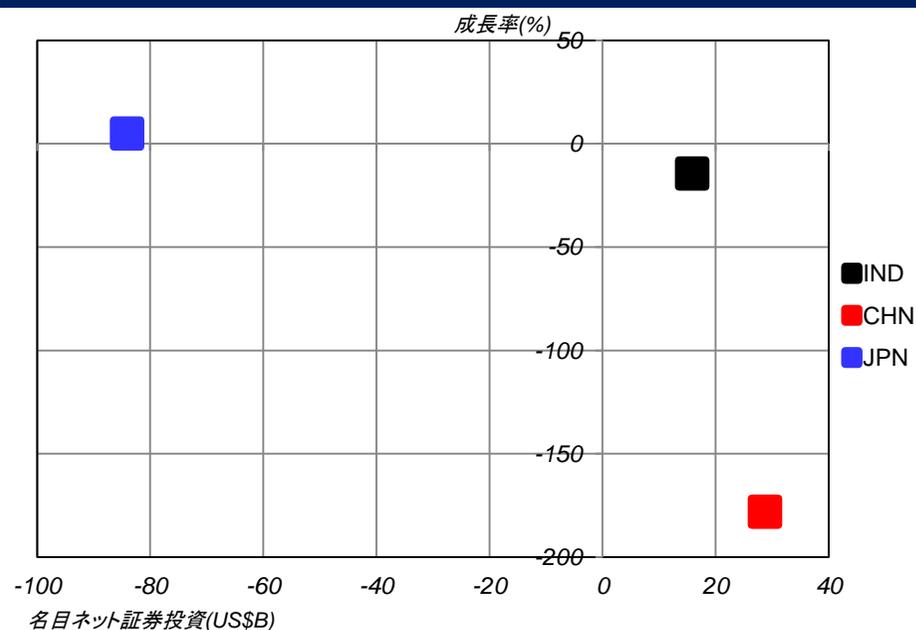
資料: ADB Economic Indicator  
(1) 2005年から2010年の平均

- ・ 新興国の場合には、流入超とは言っても、さほど大きな規模ではないことがみてとれる。その上で、フィリピンやマレーシアといった国の成長率が高いことは、実体経済の特徴とは若干ずれる面もある。
- ・ 日本とオフショア・センターは流出超である点では共通しているが、日本の流出幅(対外証券投資超)がはるかに大きいことも目立つ。

アジア諸国の名目ネット証券投資と成長率(1)



日中印の名目ネット証券投資と成長率(1)



## 2. ビジネスの特徴とその背景

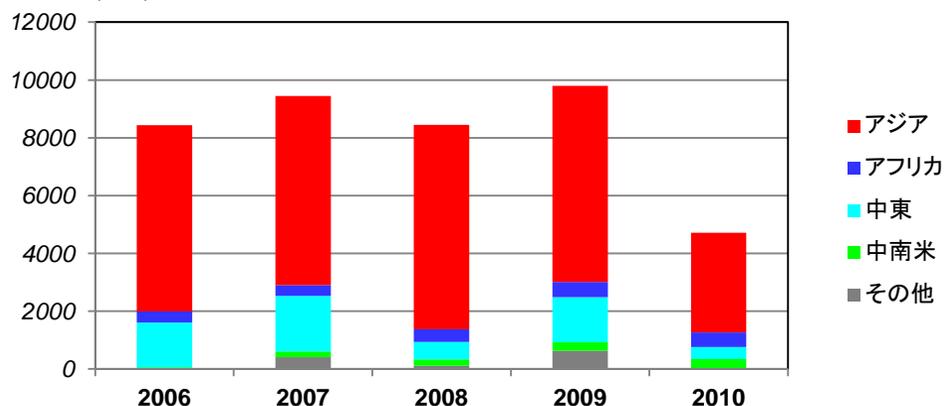
### ■ 日本との金融経済関係(1)

資料: 外務省

- ・ アジア新興国向けの円借款の多くが広義のインフラ関連である。

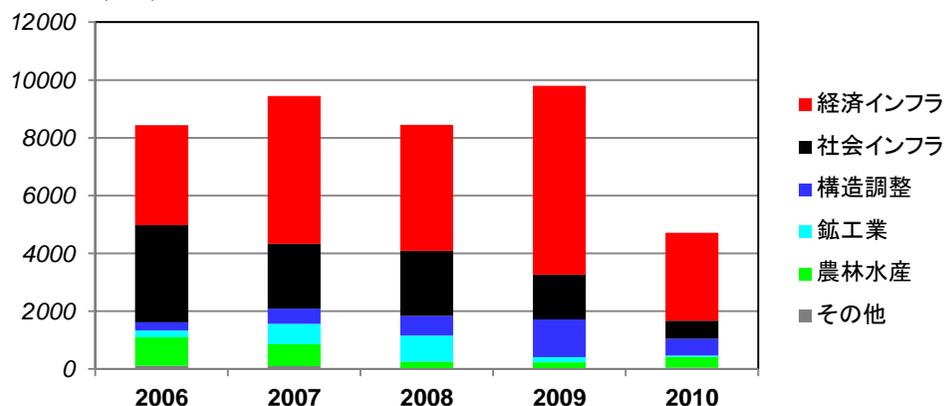
#### 地域別日本の円借款総額

円借款総額(億円)



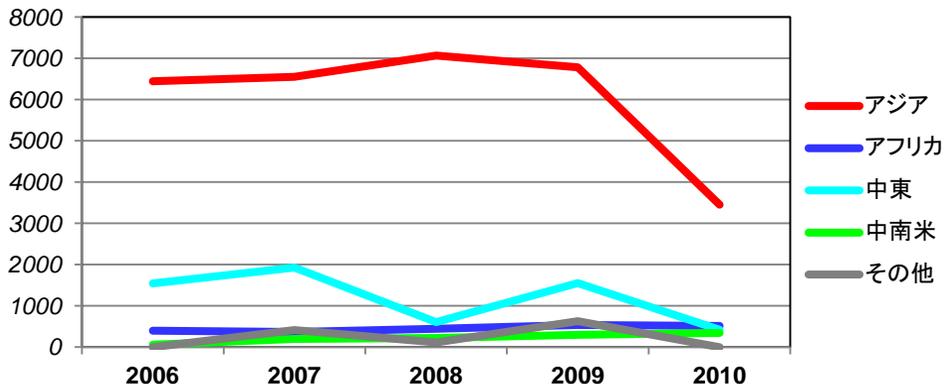
#### 分野別日本の円借款総額

円借款総額(億円)



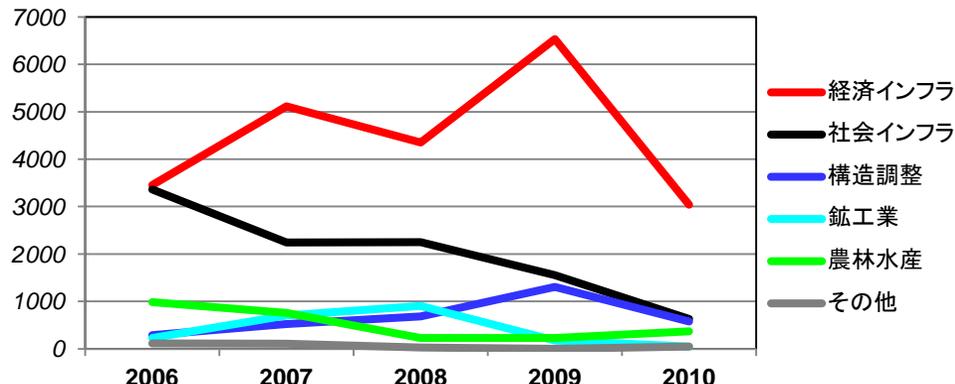
#### 地域別日本の円借款総額推移

円借款総額(億円)



#### 分野別日本の円借款総額推移

円借款総額(億円)



## 2. ビジネスの特徴とその背景

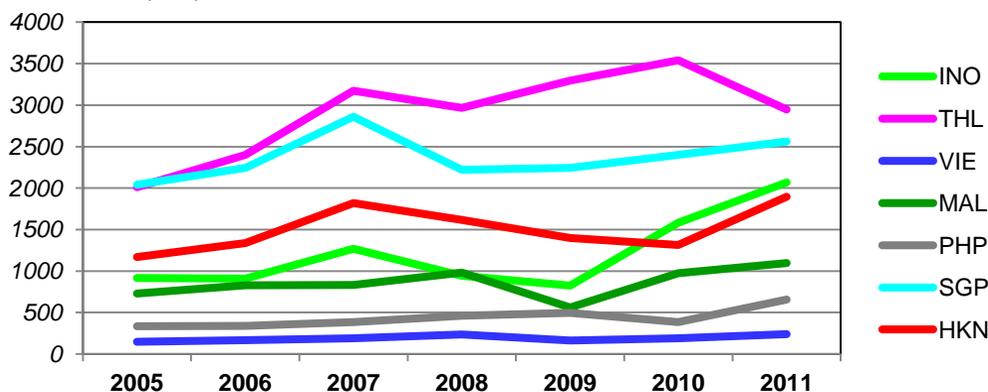
資料:財務省・日本銀行

### ■ 日本との金融経済関係(2)

・FDIに関しては、オフショア・センターのほか、タイ、インドネシア、マレーシアからの収益受取りが多い。

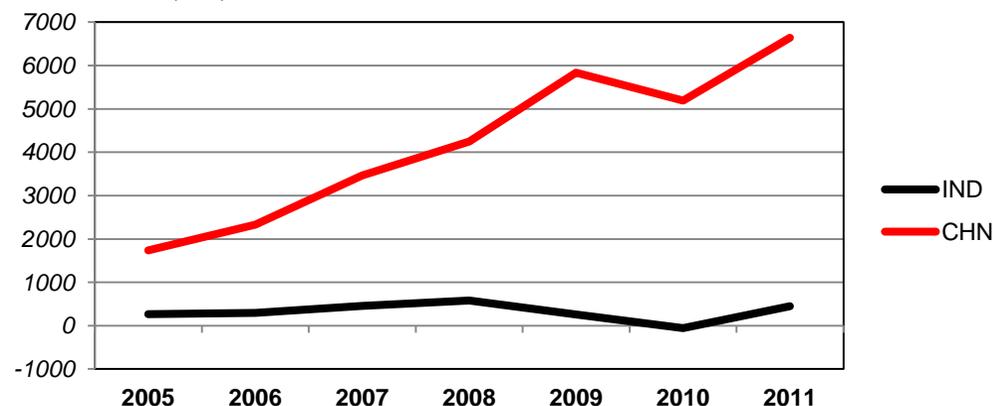
#### 日本のFDI収益受取国別推移

FDI収益受取額(億円)



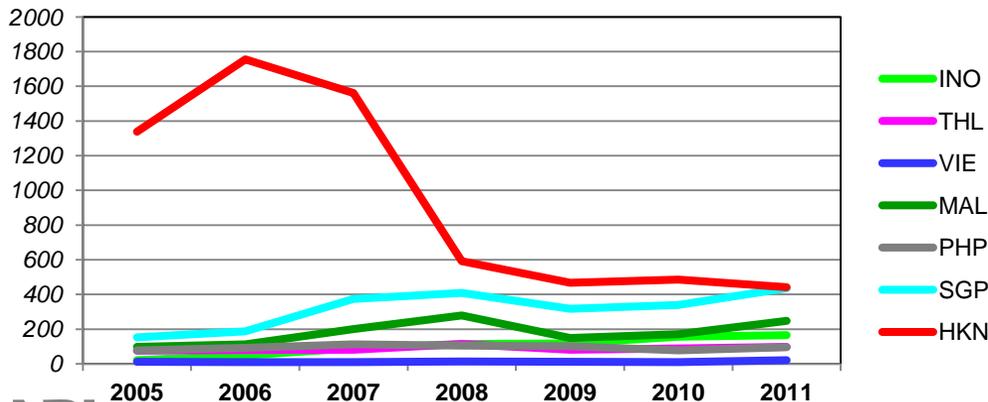
#### 日本のFDI収益受取国別推移

FDI収益受取額(億円)



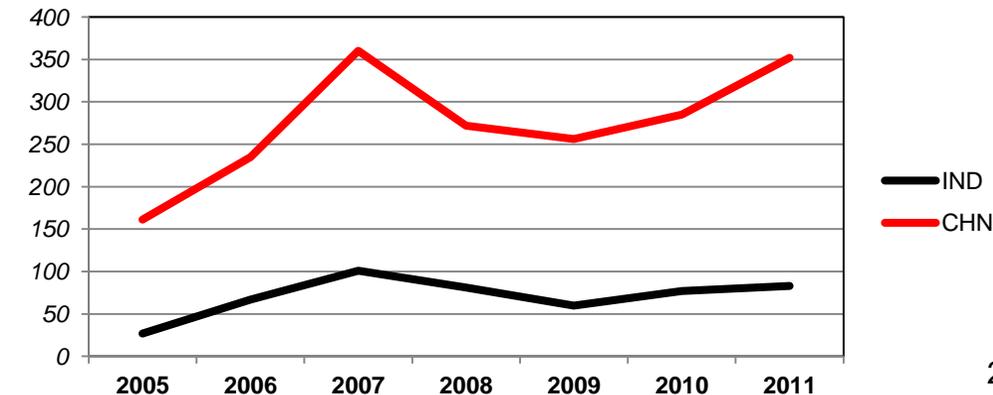
#### 日本の証券投資収益受取国別推移

証券投資収益受取額(億円)



#### 日本の証券投資収益受取国別推移

証券投資収益受取額(億円)



---

### 3. 国際部門とアジア業務

### 3. 国際部門とアジア業務

#### ■ メガバンクのアジアビジネスでの収益(概観)

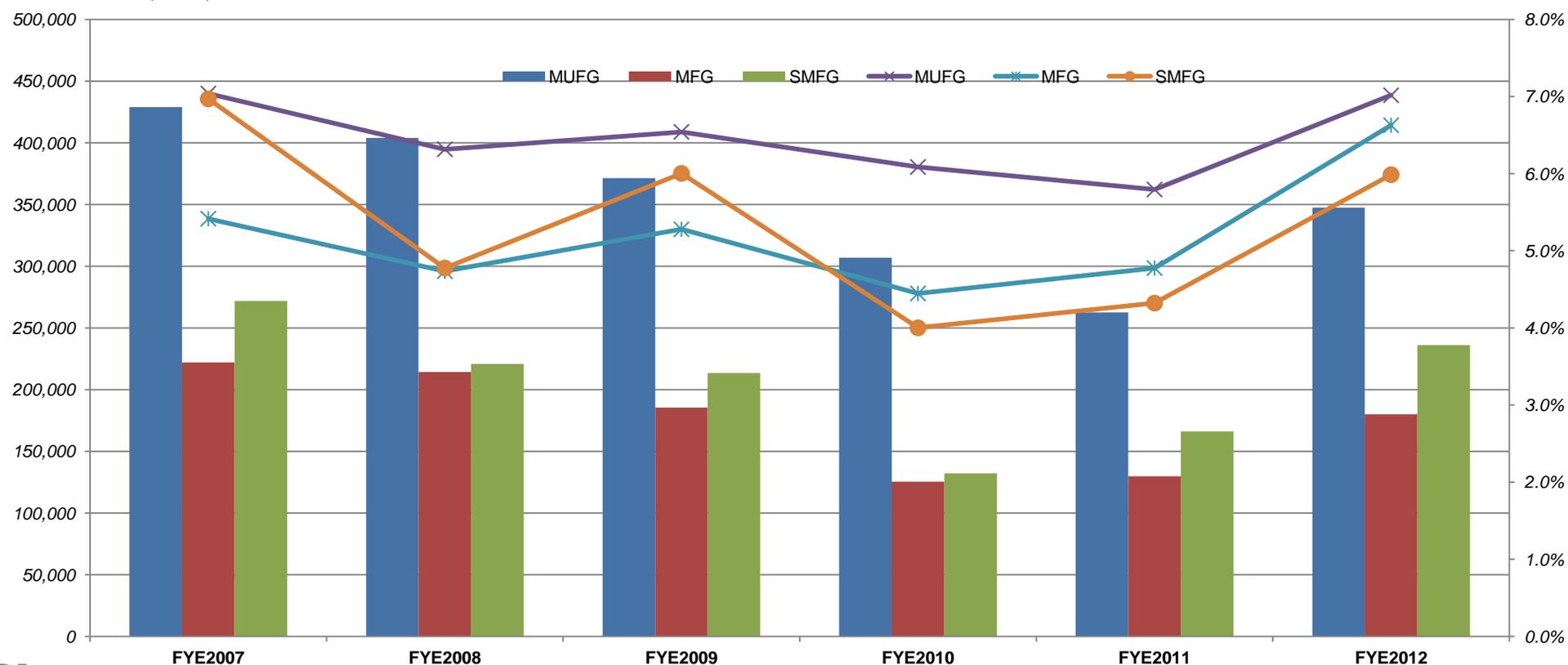
出所) 各行ディスクロージャー資料

- アジアでの収益は、業務量のリバウンドよりも遅れて2011年度に直近のボトムを形成し、今年度にかけて上昇を辿っている。なお、経常収益でみた全体に占めるシェアは6~7%となっている。

メガバンクのアジアにおける経常収益

棒グラフ: 経常収益(百万円)

折れ線グラフ: 経常収益全体に対する比率



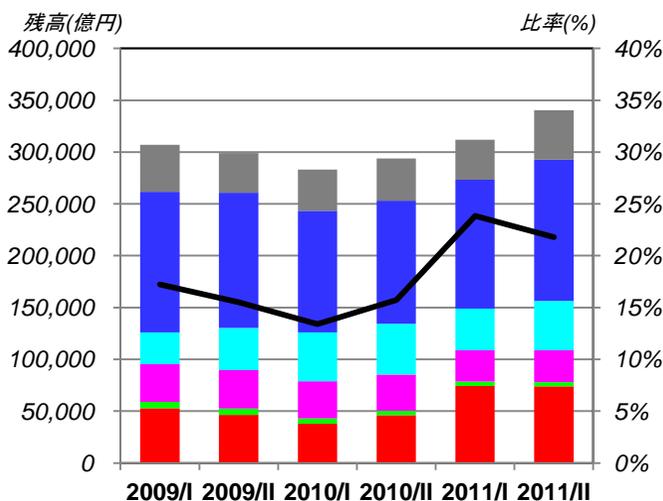
### 3. 国際部門とアジア業務

資料: 各行ディスクロージャー資料  
 (1) その他は、資金運用勘定残高とこれらの調達手段の残高合計との差

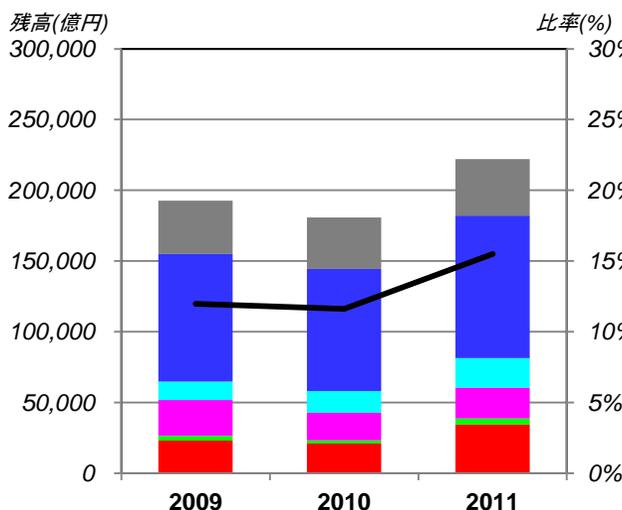
#### ■ メガバンクの資金調達(概観)

- ・ メガバンクは、国際業務に係る運用資産の概ね2/3を預金(+譲渡性預金)によってファイナンスし、約1割程度を市場性資金で手当している。
- ・ 残りの部分(「その他」)には様々な手段が含まれる筋合いにあるが、円投が相応の部分をおとめるとの見方が聞かれる。

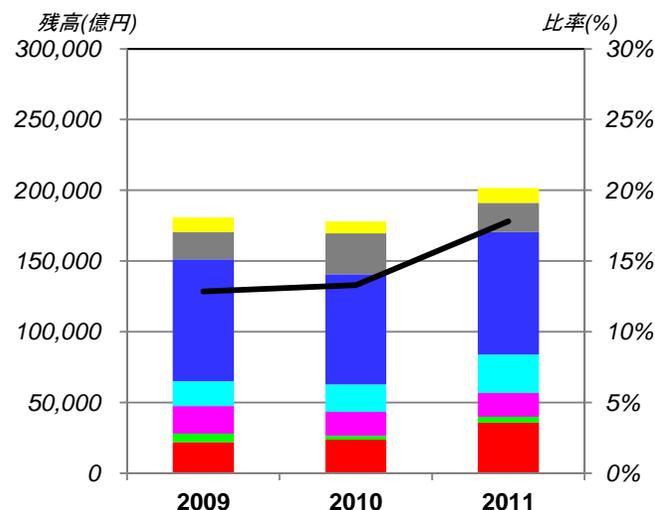
MUFG(商銀)の国際業務資金調達(1)



みずほCBの国際業務資金調達(1)



三井住友銀行の国際業務資金調達(1)



### 3. 国際部門とアジア業務

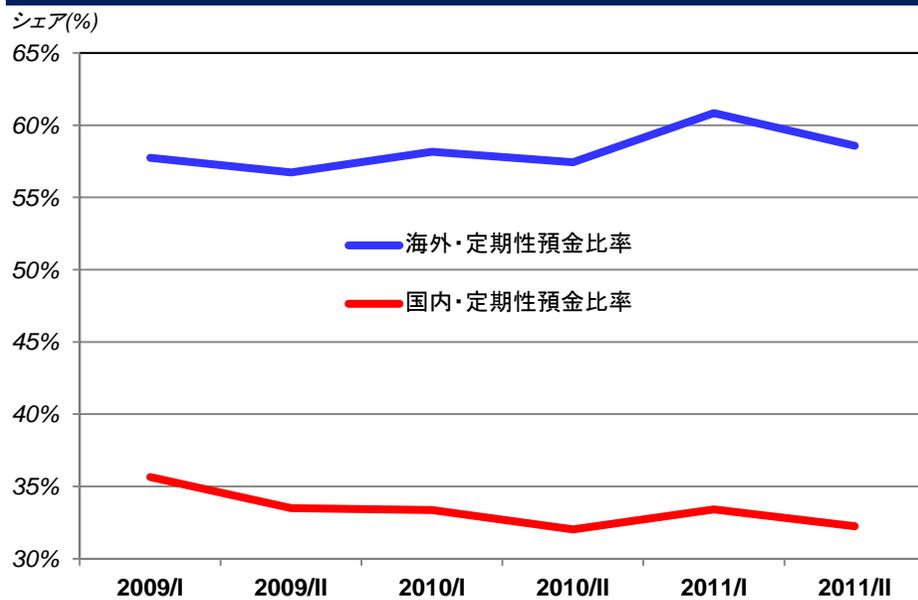
資料: 各行ディスクロージャー資料、S&P

(1) 総預金に占める定期性預金のシェア

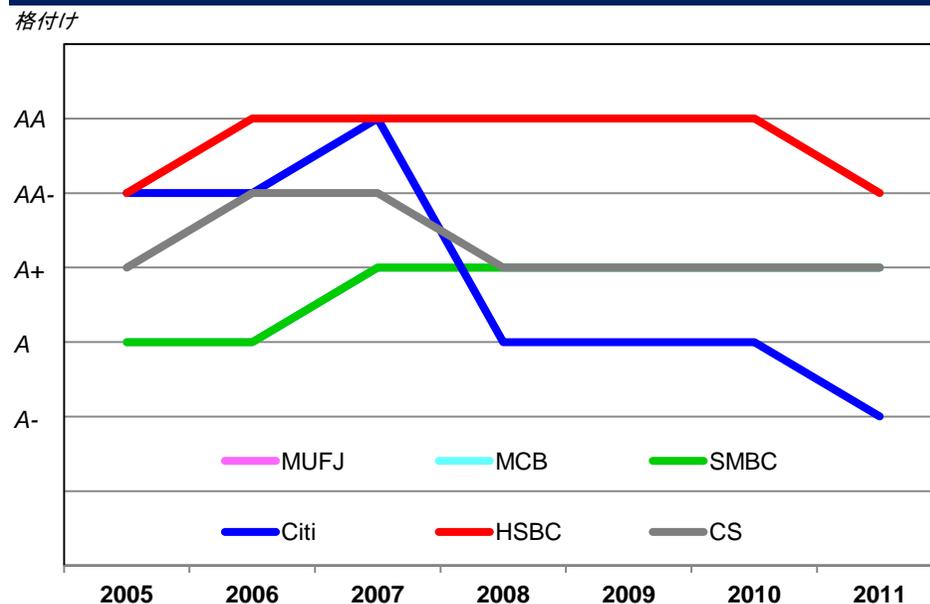
#### ■ メガバンクの資金調達(展望)

- 国際部門の資産拡大に対応して、安定的で分散した資金調達源を確保しようとする動きが目立つ。具体的には、①海外顧客からの預金調達、②社債発行が中心であり、①については年金基金や政府機関などとの安定的取引が意識されている。これらの両者ともに、米欧対比で有利化する方向にある格付によって恩恵を受ける面がある。

MUFG(商銀)の定期性預金比率<sup>(1)</sup>



メガバンクと米欧大手先の格付(各年末:S&P)



---

以上

